
僕の彼女は百四十万人

アズマダ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の彼女は百四十万人

【Nコード】

N0068Y

【作者名】

アズマダ

【あらすじ】

もし、異世界へ飛んでしまったら？ もし、その異世界が女性ばかりの世界なら？ もし、その女性達全てが、男性に奉仕する為に作られたバイオロイドだったら？ もし、そんな異世界に飛ばされたのが中2男子だったら？ そして男の子に友達以上、恋人未満のガールフレンドがいたら？ さらに、その世界に危機が迫っていたとしたら？ その危機を救う可能性があるのが自分だけだとしたら？

青少年育成条例改正案自主対策済み

作品（w）

1. 仁と琴葉、消失

「ママー！ 助けてー！」

千九百五十八年アメリカ、ルイジアナ州。

アンナ・カーペンターの目の前で、九歳になる娘が鏡の中に吸い込まれていった。

和銅六年。浦島太郎の原型が乗せられているとされる『丹後国風土記』の編纂が命じられた。太郎が竜宮城で過ごした日々は数日だったが、地上では七百年以上経っていた。

建御雷？は天鳥船？を遣わして八重事代主？（やえことしろぬし）を呼んで問い尋ねると、その父の大？に語りて言いしく、「畏ま（かしこ）りました。この国は天つ？の御子に奉ります」と語った直後、その船を踏んで傾け、天逆手を打って船を青柴垣に変化させて、内に消えた。

反粒子は、時間を逆行している正の素粒子である。リチャード・P・ファインマン。

1. 仁と琴葉、消失

「あと何分待てばいいんだ？」

せっかくの修学旅行なのに、北中学校二年生、小片^{おがた}仁^{じん}は、飛行機内でイラついていた。

もうとつくに那覇空港へ着陸している時間だ。

イラついているのは、一学年が乗り込んだ飛行機の計器不調のため、いまだ緊急着陸した関西国際空港で足止めを食らっているため

ではない。飛行機で缶詰になっているからでもない。

「大きい方でゆっくりしてるんじゃないのか？」

声を荒げる仁に対し――。

「正解！」

仁の後ろで並ぶ斧田琴葉が肩をすばめた。
おのだことは

自他共に認める綺麗な黒髪が、背中まで長い、小柄な同級生。と言っても、仁にロリ属性はない。どちらかといえばメカフェチ気味の綺麗なお姉さんは好きですかタイプ。

琴葉は平凡な顔だとみんなから言われている。すれ違う人十人が十人とも振り返るような美少女ではない。

でも仁は、仕草だとか性格だとか……優しさだとか、芯が一本通っているとか、そこがとても可愛いと思っている。

そして、お互いに同級生以上の存在。でも、恋人ではない。……今のところ。

なんで男子と女子が同じ列に並んでいるか？ それは単純に、教師の偏った男女平等策によるものだ。

「臭いは、仁の肺によるガス交換作用で消去しておいてね」

「しかたない――」

くるりと振り向き、姿勢を低くする。

「代償に琴葉ちゃんのパンツを見せ――」

乾いた音がした。低くなった仁の頭頂に琴葉の肘が落ち、顎に琴葉の膝がめり込んだのだ。

「馬鹿じゃないの？」

琴葉は、腕を組んで仁を睨み付ける。

「大人になったらソープランドに行きなさい。……でもなんでソー

プという綺麗な単語の後にランドという楽しそうな単語を付けると嫌らしく聞こえるのかしら？」

「綺麗で……楽しそうだからだ……と思う」

しゃがんで頭を抱えている仁の前で、化粧室のドアが開いた。

「出た出た、むちゃくちゃ出た。三日ぶりだよ。だいぶ腸内発酵してたよ！」

柔道部レギュラーの津元が、太鼓腹を小気味よく叩きながら出てきた。

「ほら、空いたわよ。さっさとお行きなさい！」

琴葉は仁のお尻を足で押し、化粧室へ押し込んだ。有無を言わせずドアを閉める。

「ぎゃーっ！」

くぐもった叫び声の中から聞こえた。臭気がキビシかったのだろう。

やがて、水の音に続き、仁が飛び出してきた。大きく喘いでいる。くすくすと笑う琴葉。笑顔がとても可愛い。仁は手をさし示した。

「ど、どうぞ」

「うむ」

琴葉が入ると、仁がドアに身体を預けた。そしてドアを開けられないよう、がっちりホールドする。

「ぎゃーっ！」

トイレの中から悲鳴が上がった。臭気が厳しかったのだろう。仁は個室内で息を止めていたからよくわからない。

仁はクスクスと笑いながら青い携帯を開く。心配しているであろう家族に、安否のメールを打とうとしたのだ。

ふと窓から外を見ると、空が曇っていた。

まったく！　いくら安いからと言って、毎年毎年梅雨に突入した沖縄に行くなんて。毎年毎年ダイビングコースが中止になってるというのに！

「あれ？」

電波が拾えない。おかしい。この携帯は衛星通信で圏外が無いのが売りだ。

仁は、ドアから離れって、あちらこちらと携帯を移動させてみる。

琴葉が化粧室から勢いよく出てきた。

「馬鹿じゃないの！」

肩で息をしながら仁を探す琴葉。彼女は、仁の様子に気づいた。

「どうしたの？」

仁が理由を言うと、琴葉は自分の携帯を取り出した。小綺麗にデコレートされたシャンパンピンクの携帯を開く。彼女の携帯は壊れないので有名な、一番女の子に似合わない機種だ。

「仁のケータイ、壊れてんじゃないの？　って、あれ？」

琴葉の携帯もアンテナが立っていない。それどころか、時計表示がおかしい。

「無料のを買うからだよ」

「失礼ね！　一万円以上したのよ。コンテンツだって山盛り入ってるし、類義語だとか百科事典まで入ってるんだから！　でも変ね？」
琴葉は自慢の黒髪をかき上げ、後頭部、産毛の生え際を爪でポリポリと掻いている。

そこを掻くのは琴葉の癖なのだが、綺麗な髪の毛もまたいいね。

あ、琴葉と目があった。

あわてて反らし、自分の携帯に視線を落とす。

「僕のも変だ……おっと！」

いきなり機内の照明が落ちた。エアコンが止まる。琴葉が仁の腕に絡んできた。

にやけた仁は、役得とばかりに琴葉の背中に片手を回し、もう一方の手で携帯をポケットにしまい込む。

座席各所からざわざわした声が上がってきた。生徒を落ち着かせようと、先生が声をはり上げるも、効果は薄い。昼間なのに、窓の外が真っ暗になったからかもしれない。

機体が揺れ出した。もしやバイ状況？　と思うまもなく揺れが激しくなった。悲鳴を上げて倒れる者も出てきた。

「席へ戻ろ——」

轟音と共に飛び散る窓ガラス！

続いて起こる雷撃にも似た衝撃。機体の屋根が吹き飛び、破片が飛び散る。抱え込んだ琴葉が悲鳴を上げた！

鈍い爆発音と共に機体が折れた。裂け目から進入した電光が、乗客に襲いかかる。

琴葉の腕を握る手に力が入る。周りの景色が歪み、スッと暗くなる。

琴葉しか見えない。いや、こっちを向いている自分の姿も……琴葉の後ろ姿と共に。なぜ後ろ姿？

鏡？　合わせ鏡？

上も下も右も左も無限に二人だけが映っている。ミラーボールの

様な物の中に閉じこめられていたのだ。

状況が把握できず、仁は焦った。つないだ手の温もりだけが現実を認識させる唯一の存在となった。

気がつく二人は水平になっていた。琴葉の表情が必死。二人とも息なんかしていない。

繋いだ片手。握った手を中心にくるくる回りだす。遠心力がきつい。足に血が集まる。今にも手がちぎれそう。

回転が速くなった。もともと強くない仁の握力は、限界に達している。なんとか琴葉だけでも助からないものか？

回転の角度が変わった。

ミラボールに裂け目ができたのだ。中の空気がジェットとなって外へ吹き出す。

まず、琴葉の体が裂け目側に来た。ガクンと体が加速する。

まずい！ 琴葉が吸い出されようとしている。

握り直しなどできる状態じゃない。どうしよう。繋いだ手に重圧がかかる。

遠心力という巨人が二人をつかみ、力ずくで引き離そうとしている。

抗うこともできず、あっさりと二人の手は剥がされた。一生忘れることはできない恐怖に引き攣った琴葉の顔。琴葉が裂け目に吸い込まれて消えた。

「琴葉っ！」

初めて呼び捨てにした琴葉の名前。

琴葉が消えてしまった。

これは現実なのか？ 絶対信じてない！

続いて半回転後、仁が裂け目から吸い出される。琴葉とはコンマ数秒の差。

光が目を焼く。外は明るいらしい。体に悪そうな刺激が、全身の細胞と骨格を乱暴にこねくり回す。激痛に、わき上がる嘔吐感。仁はあっさりと気を失ったのだった。

1. 仁と琴葉、消失（後書き）

初めての投稿。こんなんで良いのかな？
たぶん30章くらいになりそう。

2. クレア少尉

「気圧を調べよ！」

形の良い眉をつり上げ、クレア・コウジュ少尉が命令を下した。嫌な予感に首筋の産毛が逆立つ。

クールビューティとして部下から頼られているクレア。見た目二十歳そこそこの女性士官である。詰め襟の白い軍服。タイトミニに、サバイバルブーツといった出で立ち。

山の天気は崩れやすい。とはいうものの、この気象は異常だ。いま見上げていた雲一つ無い青空が、二つ三つ呼吸する間に炭色の雲におおわれたのだ。あまりにも異常。

「報告します少尉っ！ 気圧に変化はありませんっ！」

若い女性兵士の報告がうわずっていた。しかたあるまい。一ヶ月前に入隊したばかりの新米三等兵だ。

「変化無し。了解」

部下の報告に頷くクレア少尉。声と態度はのんびりしたもの。

これはわざと。クレアの心臓は危機に備え、自動的に活動モードに入っていた。

それが証拠に、額のクリスタルを指でトントンと叩いている。これはクレアの癖。

今はまずい。ここにいるのは、副官のシェリルを除いて新兵ばかり。三日前から、新兵達を集めた山岳訓練の最中。教育監督係のクレアに言わせれば、体のいいオリエンテーリング。

ここは、とある山脈の中腹。小さいながら、軍の施設。サバイバルに必要な一応の物はそろったシエルターにもなっている。

風が出てきた。気温も下がっている。心配なのは……。

クレア少尉はシェリル軍曹に尋ねた。解っていることなのに。

「五班、まだか？」

「最後尾の五班。まだ見えません」

見れば解る。律儀な副官の報告を聞きたかったわけではない。自分の心の乱れが言葉となって出たまで。

一班から五班まで、おのおの九人の中隊一個編成。一定の間隔を開けて、山道の踏破カリキュラム全行程四日の予定。今日の訓練が終われば後は山を下るだけとなった事実上の最終日。

等間隔で出発したはずなのだが、五班の到着だけが、予定より三十分ずれ込んでいる。

もう一人の副官が殿しんがりを受け持っているから大丈夫だと思うのだが……。

「シェリル軍曹！ 命令、無線封鎖解除。五班に通信！」

クレアが命じる。クレア子飼いの部下、シェリル軍曹が敬礼。所定の者達に次々と命令を下していく。

主命を帯びた戦闘以外で、無駄に兵の命を失うことは、クレアの矜持が許さなかった。

気圧に変化がないのにこの荒れ模様は？

異様な体の高ぶりを認識するクレア少尉。

ふと、新兵達を眺める。

三六人七二個の目がクレアに集まっていた。どの目も不安と、生まれもって身につけさせられている何かの予感による熱っぽい光を湛えていた。

みんな女性兵士。

熱を感じたクレアは、軍帽を脱いだ。銀のショートカットを後ろに撫で付けてからかぶり直す。先ほどから耳鳴りが続いてしかたない。

「電波状態不良です。五班、応答ありません！」
「了解！」

ますます怪しい。気圧の下がる気配がない。なぜ電離層が乱れているのか？

異常な天候によるもの。クレアはそう判断した。

「グランツァで出る。救命パック用意！」

グランツァとは、五年前に軍へ配備された正式車両。踏破性に優れた二輪オフロード。

カーキーを主体とした迷彩に塗装されたグランツァが、引き出された。

顎ひもで軍帽を固定し、小ぶりのバックパックを背負い、スカートのまま跨る。クレアのカンが、パンツに着替えている時間は無いと告げていた。

「シェリル軍曹、後は任せる。兵達の安全を第一に考えて行動せよ。異常事態である。軍規など無視しろ。責任は全て私が持つ！」

敬礼するシェリル軍曹を尻目に、メインスイッチに指をかけ一息つく。これは厳罰モノだなど、頭の中で覚悟を決める。

メインスイッチを押し込む。小さく唸る発動機関。マニュアル通り、照明類の動作を確認。スタンドを跳ね上げ、アクセルを回す。後ろのブロックタイヤが土を噛む。軽くフロントを持ち上げ、勢いよく飛び出した。

スタンディングのまま、速度を上げる。岩がむき出すラフな路面。サスペンションと膝と腰でショックを吸収する。なかなかの腕前。

岩場を駆け上がり、獣道をかき分け、訓練コースを逆走する。五班と出会ってもいい頃合はとつくに過ぎた。時間ばかりが過ぎていく。

本来なら、そして、普段のクレアなら、二次遭難を避けるためもっと早くに引き返していただろう。

過ぎていくだけの時間。

そのワードが、必要以上にクレアを焦らせた。嫌な汗が噴き出し、体を流れる落ちる。

風が強くなってきた。

山腹に作られたつづら折りの山道をグランツアのパワーにもの言わせ、素早く駆け上がっていく。右は山肌、左は崖。

こんなところで落ちようものなら命はない。例え命があったとしても、四方を山に囲まれた窪地に落ちることになる。生還は難しい。

嫌な予感と、広義の意味での希望に顔を上げ、テーブル状の山を見上げる。元は優雅なラインを描く成層火山だったのだ。だが今は、

中腹あたりからスパリと切り取られた台形の山となり、最高峰の地位も、こちら側の双子山、ハティ山に譲り渡していた。

そのハティ山上空を中心として広範囲に黒い雲が、重厚な渦を巻いている。目で動きが追える。明らかに異常気象。

——この気象状態は！

クレアの記憶層から忌まわしくも正確な情報が引きずり出されようとしたその時。一本の太い光の柱が、ハティ山頂と渦を巻く黒雲の中央を繋いだ。

「ビフレストの橋がつっ！」

叫ぶクレア。彼女が意識を保っていたのはそこまでだった。

二つの山を含む辺り一帯は、白一色で塗りつぶされたのだった。

2. クレア少尉（後書き）

第二の主人公？ 登場。

3. 仁、発見

クレアの意識は唐突に戻った。

気がつけば、仰向けに倒れていた。どれだけの時間、気絶していたのだろうか？

頭の横にはバスケットボール大の石が転がっている。

遙か頭上。崖から突き出した木の幹に、グランツアのタイヤだけが引っかかっていた。

——あそこから落ちてよく助かった。

右手、握れる。左手も握れる。右の太ももに強い刺激が存在する。それにもまして足が重い。頭を持ち上げて見れば、下半身が微細な砂に埋まっていた。浅く埋まっているだけ。砂は埃のように軽かった。

足を上げるだけで簡単に抜け出せた。下になっていた土が柔らかかったのが幸運だったのだろう。

体を起こそうと、いつものように右腕を支えにした。

「くっ！」

右肩に走る痛覚。

「これは脱臼？」

大事なときに！

左手と足腰を使い、何とか膝立ちの体勢に持ってきた。

俯いて右拳を地面の固い部分に当てる。肩の角度を調整。体重を入れる。

乾いた音を立て、肩関節が入った。

「はうっ！」

激痛という感覚は、ほんの僅か。続いて押し寄せる別の感覚。背筋を駆け抜け、脳のとある部分に到達する。

表現しがたい体の反応。それは体の裏切り。長い間、クレアは息を止めていた。止めざるを得なかった。裏切り者の体が、呼吸を拒んでいた。

やがて訪れた神経の安寧。息をすることを体が許す。激しく荒く呼吸。どっと噴き出す汗が下着を濡らす。

深呼吸を三回繰り返し、強制的に息を整えた。

気になっていた右の太ももを見る。ぱっくりと口を開けた裂傷。横方向に七センチ。浅くはない。結構な量の血が流れ出ている。

背中の救命パックは無事だった。飲用の水で泥を押し流し、消毒剤で傷口を洗い、細胞賦活軟膏を塗り込み、止血テープを貼る。

傷口が作り出す、あの刺激信号。クレアは身震いしながら、それをやり過ごした。

もうすぐ必要になるであろう医療キットを節約しようかと思ったが、そのために自分が動けなくなっは元も子もない。おそらく、自分が現場に一番近いはず。

クレアは圧迫用包帯を取り出し、太もも患部を三重巻きにした。格段に動きやすくなる。

続いて、救難用の無線機を取り出し、スイッチを入れる。雑音しかしなかった。

「だめか……」

おそらく気を失ったあの時、バースト状の電磁波が……。

何時までもこんなところでぐずぐずしてられない。最近身についたクレアの長所は、気持ちの切り替えが早い事。

クレアはバックパックを背負い直し、砂場を後にする。

三歩歩いて違和感を覚えた。頭が寂しい。軍帽が無い？
近くに落ちていないか？

先ほどまで転がっていた場所に視線を向ける。あった！

砂に埋もれることなく、行儀良く鎮座していたそれを勢いよくつかみ取り、流れるような動作で回れ右。再びクレアは歩き出した。

その時だった。巨大な岩石が背後に落下したのは！

衝撃と風圧が、クレアの体を押し倒す。

風に舞う砂埃。すぐ隣を見慣れたタイヤが転がっていく。

肩の痛みも忘れ、一挙動で立ち上がり振り返ってみる。軍帽の落ちていたあたり、クレアが倒れていたあたりに、軍用トラックほど角張った巨石がめり込んでいた。

崖を見上げると、パラパラと小さな石ころが降ってきている。

「これは……早くこの場を離れた方が良さそうだ」

クレアは、右肩をかばいながら、ここから離れる。落石のおそれがある地帯からは離れるに限る。方角を確認しようとしてハティ山を探す。

無かった。

ただ、ハティ山とおぼしき場所に、見慣れぬ台形の山が。……まるで中腹より上をスッパリ切り取ったかのような。

クレアは視線を横方向へずらした。同じような形をした緑の山がある。

今日この時をもって、ハティ山は十年に渡って防衛し続けたアルフレイ最高峰の地位を他者に明け渡したのであった。

「やはりビフレストの橋がかかった！」

エルフィとしての最優先状態を頭脳が起動した。忘れかけていた神への憎しみが顔を覗かせたが、それを押しとどめる力を持った強制力が行動を優先させた。

「い、急がなくては！ この近くに……必ず……」

クレアラらしくないあたふたした動作。崩れかけているハティ山へ向かう。

あの山のどこかにいるはず。

倒木を越え、下草をかき分け、岩場を走る。右肩が熱を持ってきた。太ももの傷口から血が滲んでくる。しかし、脳の処理スペースに、そのことを気にかける余裕はない。

いつの間にか、まだ新しい青肌を見せる巨石群に踏み込んでいた。最後の岩を回り込む。

クレアは神を信じない。むしろその不公平さを憎んでいた。だが、たまには気まぐれを感謝してみようと思った。

なぜなら、その先に、目的の場所があったからだった。

3. 仁、発見（後書き）

次回、明日31日UPの予定です。クレアさん、短い間の主人公、ありがとうございました。あ、撃たないで！

4. プラストエンド・サバイバル (仁、再登場)

遠くで、誰かに呼ばれた気がした。

仁のぼんやりした脳の言語野が、自動的に人の声を認識した。とても小さい声だ。女の人の声。だれが何に向かって……。

どうやら自分に向けたメッセージを送り出しているようだ。いったい誰が？

正体を知りたいという要求が、むくむくと湧き上がってくる。とたんに声が大きく聞こえた。自然とまぶたが開いていく。

人形のように美しいお姉さんだった。瞳が金色。額に張られた逆三角形のクリスタルが澄みきっていて綺麗。

声の正体、確認完了。まぶたを閉じる。

殴打音と共に、鋭い痛みが頬へリズムカルに伝わってきた。許容量をオーバーする刺激を受け、仁は激しく目を開けた。

「気づいたようだな」

ややハスキーな声。細い眉をキリリと吊り上げたお姉さんが、心配そうに仁の顔をのぞき込んでいた。初めて美女という存在に出会った。

またもや強烈な睡眠欲が湧き起こる。そして倦怠感も消えることがなかった。

なんかどうでもいいやって感じ。

仁はこのままの状態で、もう一度目を閉じることにした。

「寝るナ。体を――。ここはキケンな――。移動――死ヌぞ！」
お姉さんが、なにか叫びながら仁の体を揺する。揺れた箇所が針で刺された様に痛い。

「ここ――土砂崩れ――沢になって――。あの木が――場所ま――移動するぞ！」

仁の体が引き上げられた。脇の下に、お姉さんの体が滑り込む。

いい匂いがする。これが大人のお姉さんの香りか……。

わずかな脳内作業領域が、体の変動を感じ取った。仁の体が大きく震えだしたのだ。

いや、揺れているのは地面の方だ。どこからか、うなり声のような音が聞こえてくる。

「土砂崩――。走れ！」

どうにか「走れ」という単語だけ聞き取れた。走る行為も知識として知っている。どうやら命令文らしい。だからといってランニングのできる体調ではない。

それ以前に、仁は迫りつつある危機を認識できていない。意識はまだ混沌としたままだ。

仁は、突然の浮遊感を感じた。

この浮遊感は、お姉さんが仁を担いで走り出したものだった。

女の人の力で、軽いとはいえ中学生の体重を担いで走れるだろうか？

案の定よろめいていた。それも歩くようなスピードで。

何となく、仁も走らなきゃならない、とだけ認識。モサモサと足

を動かすが、何の役にも立たない。むしろバランスが崩れて邪魔になる始末。

地響きが耳元で聞こえるようになった。お姉さんの荒い息づかいが耳元で聞こえる。足元に、砂と小石が流れてきた。城壁のような土砂が目の前に迫っている。

これは間に合わない！ 仁の濁った頭でさえ、そう判断できた。

仁の体が地面におろされた。お姉さんの体が覆い被さる。そんな事をしたって、万に一つも助かりっこないのに。

仁のぼやけた目が、安全地帯までの距離を測った。濁った意識がそこへ到達するまでの時間を算出した。

——要は、あそこまで移動すれば、お姉さんが助かるんだ。

仁は、お姉さんのからだに手を触れた。そして——。

気がつけば、草むらの中で寝転がっていた。なんだかずいぶん長い時間歩いていたような気がするんだが……あ？

仁の意識は突然の回復を見せた。

ここは森の入り口。数万トン単位の土石が、一メートルと離れず横たわっていた。

額に違和感。右手を持って行くと、頭に包帯が巻かれていた。

それを確認した右手にも包帯が巻かれていた。だれが手当をしてくれたのだろうか？

すぐに解った。

なぜなら、隣で片膝をついたお姉さんが、残った包帯をケースに

しまい込んでいたからだ。

尖りまくった人だが、綺麗な女の人だった。

年の頃は二十歳過ぎ……の軍人さん？ 頭のとっぺんには……軍帽っていうんでしょか？ 沖田艦長が頭に乗付けてるあの帽子。仁は順を追って視線を下げていく。

帽子の、庇の下から銀の髪の毛が垂れていた。

細くて濃い、つり上がった眉。人形のように綺麗な顔。整いすぎた顔だ。

深紅のルージュをひいた艶やかな唇。下唇が肉感的でとてもセクシー。

きつちりと止められた詰め襟は、びしびしの堅物イメージ。

グレーを基調にした軍服……らしきものを着ている。大きな肩パットが入っているのだろう。やけに肩が張っている。それと窮屈そうに、ぱつぱつに張った胸。細いウエスト。

唯一の不明部分であるタイトミニ。ごついジャングルブーツで足を固めている。

スカートの奥から、チラリと白い逆三角形が見えているのだが、あれは何だろう？

おパンツ？

認識した瞬間、仁は完全に意識を取り戻した。偉大なり、煩惱！

いやいやいや！ そんなことより気になるのが、お姉さんの目。

正確には虹彩。金色の目って、初めて見た。

あ、目が合った。

「気がついたか？ 怪我は擦過傷だけだ。化膿の可能性は低い」
お姉さんはぶっきらぼうにルージュの唇を開いた。うまいこと言えた顔で満足げに見えるのは気のせいかな？

体を起こそうとして力んだ途端、全身の筋肉に激しい痛みが走った。

仁の体は、今のところ自由がきかないようだ。でも、口は動いた。

「あなたはどちら様で？ ここはどこ？ 僕はいたい……」

「状況を説明する。ここはアルフレイという土地。現状、我ら二名は、危険値レッドの地域に滞在中。無線は通じない」

仁は、何のことか全く理解できないでいる。というか、理性が理解を拒否をしている。

「私の名はクレア。クレア・コウジュ。アルフレイ陸上軍少尉を努めている。体年齢二十の内年齢二十四だ！」

やっぱり軍人さん！ アルフレイってどこの国だ？ 今気づいたけど、この人、日本語を話している。

「……き、貴様の名は？」

少し口の端を引き攣らせながら、続けて名を問うクレア。視線は微妙にそれている。

「僕の名は……あれ？ 僕の名は……」
名前が出てこない。仁の顔がこわばっていく。

「落ち着け、少年！ どんな所に住んでいた？ 家の間取りは？
ご両親は？ 学校は？」

クレアが矢継ぎ早に質問をしていく。

仁は、家の玄関を思い出した。お母さんは下手くそなケーキ作りが趣味だ。お父さんは小さな商社に勤めている会社員。自分は学生。そう中学生だ。

修学旅行。飛行機事故。

音を立てて、記憶の鍵が鍵穴をこじ開けた。

「思い出した！ 僕は仁。小片仁。……そうだ琴葉ちゃんは？ 琴葉ちゃんはどこに！」

勢いよく立ち上がる仁。周囲を見渡そうとして首を振って……貧血と吐き気。

仁は、弱々しくしゃがみ込んだ。

「今の今まで寝ころんでいたヤツが急に立ち上がるからだ！ しばらく座っている。すぐに元通りになる」

腰に手を当てた立ち姿で、厳しく注意するクレア。

血の気の引けた仁。青い顔をして汗を流している。

「で、でも、ついさっきまで手を繋いでたんだ。たぶん、この辺りに……」

見えるのは土砂崩れの現場。仁の青い顔が、さらに青くなる。

「まさか！」

「落ち着け！ か、彼女は土砂の下敷きになどなっていない！ 半開きになった口。なぜクレアが知ってる？」

仁は一筋の望みに託し、クレアの顔を仰ぎ見たのだった。

4. プラストエンド・サバイバル (仁、再登場) (後書き)

この勢いで連投UPの予定！ このままクレアさんを主人公にすげ替えようか？ という誘惑に負けず仁、再登場！ 仁君強い子負けない子。

誤字脱字、言い回し等、変なのがあったら連絡ください。 修正します。

5. 前進。

「じゃどこに？ 知ってるんですか？ 琴葉ちゃんは無事なんですか？ いまどこに？」

クレアの肩を掴んで揺すりたいたい心境だった。そんな事できもしないヘタレの仁は、手を握ったり開いたりして我慢していた。

「そんなにコトハという女の事が心配なのか？ うんうんと、何度も首を縦に振る仁。」

クレアは、なぜか不安そうな表情をその美しい顔に浮かべた。

「き、きさま、コ、コトハという女のことか……好きなのか？」
仁の青い顔が赤に変わる。

「忙しい少年だな。コトハの事が好きなのかと聞いている。これは大事なことだぞ！」

柳眉を釣り上げたクレアの顔が迫る。パーフェクト美人を見慣れてないととても怖い。

「え、えーと、その、……好きです」

恥ずかしいやら逃げ出したいやらで、仁は恐る恐るクレアの顔を見た。

口をへの字にした顔が遠ざかる。むーん、と唸るクレアの頬がピンク色に染まる。

「ひょっとして、クレアさんって恋愛に免疫のない人なんですか？」

「うるさい！ 本官だって恋愛の一つや二つ！」

真っ赤な顔をして怒鳴るクレア。この年で恋愛が一つ二つなのかよ、と、仁としては嘔み付きたかったが怖いのでやめた。

「それで、琴葉ちゃんの安否は？」

このままではラチがあきそうにないので、仁は強引に話を続けた。

「残念だが、それについて話す権限は、本官に無い」

ぷいと視線を反らせるクレア。

「言わせるだけ言わせておいて！　なんだよ！　教えてよ！」

「話すべき権限を持った人物がセンターにいる。……そういう事だ。貴様がその者に直接聞くがいい」

クレアの焦点は仁の額に集まることで落ち着いたようだ。何らかの葛藤があったのだろうか。頬が上気している。

「じゃ、生きているんですね？」

仁が一步前に出た。一步下がるクレア。

「機密事項だ！」

「怪我してないんですか？」

さらに一步進む仁。さらに一步下がるクレア。

「それも機密事項だ！」

「どこにいるんですか？」

「だから機密事項だと言っとるだろうが！」

クレアがキレた。足音を立てて一步前に出る。

「ひいっ！　すみませんっ！」

この逆襲に、仁が慌てて後ずさる。見慣れない金色の目で睨まれると、とても怖い。夜、光ったらどうしよう！

「どうやってあの土砂から逃げられたか、いまいち理解に苦しむが、

助かったのだから良しとしよう。とはいうものの、この場所はまだ危険地域だ。取り急ぎ可及的速やかにここを離れるぞ。五秒で準備しろ！」

言うなりクレアはバックパックを背負った。

「いやちょっとあの……」

軍隊とはこのようなものなのか？ それを民間人に押しつけて良いのだろうか？

「ちょっと待ってください！ 携帯持ってますから！」

ポケットから携帯を取り出す。衛星通信で圏外のない携帯だ。

「これで……あれ？」

圏外の表示。

「気が済んだか？ 行くぞ」

衛星通話なんだけど……。

否応なく体を動かすも、体のあちらこちらから痛みの信号が伝達される。そこかしこの筋肉が悲鳴を上げ、仁を非難しだした。これはまだ動かない方が体によい。

「クレアさん、動けないものは動けません！ もう少しこのまま——」

三発の銃声が轟いた。

仁の足元、左右そして前方の三箇所。無彩色の煙が立っていた。

クレアが握る拳銃の銃口からも、紫の煙が立っていた。

「面倒な子供だな」

さあついてこい。とばかりに首をクイと捻り、大股で歩き出すクレア。

仁は足を引きずりながら、一生懸命歩き出した。

歩き出したのはいいが、十分と保たなかった。

「あのー、足が痛いんですけどお」

「セントラルシティに着けばマッサージ屋がある。そこで足の裏マッサージでもしてもらえ。本官は嫌だがな。あんな痛いのに」

話にならない。

「もうだめっス！」

腰から下が動かない。仁は足から崩れるようにしてへたり込んだ。後は、はあはあと肩で息をするのみ。

「仕方ないな。どれ、本官が元気にしてやろう」

バックパックを降ろすクレア。中から薄いシートを取りだしその場に広げた。

「ここで横になれ」

クレアがシートを指さす。

固まる仁。『元気にしてやろう』と『横になれ』という二つのワード。

これは「体を横たえて、リラックスなさい。お姉さんが、元気にしてア・ゲ・ル♪」ということか？

いけない妄想を膨らます仁。

極度の疲労を負っているにも関わらず、キビキビした動きで仰向けに寝転がる。

次にかかるはずの言葉「リラックスして」を心待ちにしている。

「そうじゃない。ベルトをゆるめて、うつぶせに寝ろ」

バックパックをごそごそやってるクレアさんから指示が飛ぶ。ベルトをゆるめろと指示が出た。……べ、ベルトっスか？

「う、受けですか？ 僕、受けっスか？」

「受け身だ。体の力を抜いてリラックスしてろ」

き、きたーっ！ 受け身来た。リラックスと共にやって来たー！

「は、初めてなので優しくしてください」

」

クレアさんの手が仁の腰にかかる。ベルトを引き抜いたズボンにかかる。

「なんだ初めてか。よしよし、お姉さんに全て任せて、力を抜け」
パンツごと一気に下げられたズボン。むき出しになったお尻の双球が、山のすがすがしい空気を感じて緊張する。

ああ、さようなら僕のアレ。そして、こんにちは僕のソレ。

「こら、力を抜け！」

尻たぶに、クレアさんの柔らかくて暖かい手がかかる。バラの花びらが散っていくイメージ。

「は、はい！ ごめんなさい琴葉ちゃん——はうっ！」

感覚が違う。約束と違う。予定調和と違う。何もかも違う。

気持ちよくない。むしろ痛い。むしろ激痛？ なにこれこわい。

「すぐ済むからな。筋肉注射だけど痛くない痛くない。消毒忘れたけど大丈夫だ」

この感覚は、注射器？ その針？ 太いのが刺しこまれて出血？
冷たい液体が、臀部の筋肉に浸透していく。

「よし終わった。よく我慢したな。えらいぞ」

大技をキメた大型犬を褒めるがごとく、抜き取った跡を乱暴にスリスリするクレアさん。

「もうズボンはいいぞー」

肉体的痛みと精神的痛みから涙になっていた仁。意味はわかったが理解できないでいる。

「こ、これはナニ？」

「危ない薬ではない。栄養剤だ。……ヤッバリー製薬のニソニク注射。有名だぞ」

「すぐごとズボンを上げる仁。何かに負けたような気がするが、何にだろう？」

「さあ、これで歩けるはずだ。出発するぞ！」

手際よく後片付けを終えたクレアの後にしたがう仁。言われたとおり、足が軽くなっている。

しかし、前にも増して心が重くなっていく仁であった。

5. 前進。(後書き)

夜なべ（w）。手袋を編むように、5話アップ！次回、今日（11／1）の夜、時間未定でアップの予定。がんばれ、私！

6. あれ？ 遭難？ クレアさんと仁。

森を抜け、地肌むき出しの山腹を歩く。上ったり下ったり、岩がごろごろしてたり、倒木を乗り越えたり。もちろん道など無い。足場は、前後左右どちらかに必ず傾いている。

先を進むクレアは、叱咤しながらもペースを調節して歩く。

ニンニク注射で疲労感は消し飛んだものの、本調子でもない仁。何度も足を滑らせたり、ふらついたりさせていた。だが、その都度クレアから手が伸び、大事に至っていない。

そんなこんなで、仁は何かクレアの後ろに続いていた。

登りと下りがワンセットあった後。今は鬱蒼と茂る木立の中を歩いている。

仁の目の前で左右に揺れているのはクレア少尉のタイトミニ。：

…を通して見える魅惑的な双丘。

実にボンキュッバーンな女性的フォルム。軍服にしては短すぎるスカート丈が気になって仕方ない。

登りともなるとなおさらである。スリットが後ろに有れば、もうアレなのだが、いかんせん、前方左に有るのがなんとも惜しいところだ。

——それは置いていて。

…：最初から気になっていたが、右太ももに包帯が巻かれている。

少量の血が滲んでいた。右足の歩みは力強いものだが、ややもすると左足に重心が移る。

右腕が変だ。左腕に比べ振り幅が少ない。かなり前から、枯れ枝を何本も拾って小脇に抱えているが、拾う動作は、主として左手が行っている。

右腕が変と言うよりも、右肩をかばっているように見受けられる。クレアさんも怪我をしているんだ。

「……どこまで歩くんですか？」

「移動の目的は救助隊との合流だ。黙って歩け」

後ろの仁を見もしない。また枝をひろった。

「救助隊が出てるんですか？」

「貴様を捜すために、軍は大規模編成の救助隊を組織している。黙って歩け」

たいした自信だ。……仁を探すためにというくだりが怪しい。仁個人のためだけに捜索隊が組まれるとは思えない。だいいち、この訳のわからない土地で、仁の存在を知るのは目の前を行くクレアさんだけだ。

仁は歩くのをやめた。

「クレアさんだって遭難している口でしょう？　なんで救助隊が出てるって断言できるんですか？　気休めはやめてください！」

クレアの歩みが止まった。振り向いて仁を金色の目で睨みつける。「我がアルフレイ軍の最優先行動事項だ。ビフレストの橋……簡単に言えば、特殊な天変地異だ。その事象が観測されれば、全てに優先して救助活動が開始される。ただし……」

クレアが言葉を句切り、手にした枝を空に向け、くるりと輪を描いた。

「この磁気嵐が収まらぬ限り、対磁装備の小部隊しかこのエリアに突入できないだろうな」

仁もつられて空を見上げるが、木の枝の隙間から、空のかけらが

見えるだけ。ひょっとしたら見えるかもしれないと思ったのだが、やはり磁気は目に見えない存在だった。

クレアにも見えるはずないのだが……まだ通信機が使えないからなのか？

「それもこれも貴様一人のためだ。貴様は救助隊と出会う。ブランディーセットの付いた最高級の救急車で搬送される。目的地はリゾートホテルのような病院。この国トップクラスの腕を持つ医師と、優しいナース達が操る最新鋭の医療設備……」

そこで何かを考え込むクレア。

「賭けようか？ 本官が外したら、なんでも言うことを聞いてやろう。望みを言え！」

意地悪く笑うクレア。それはそれでまた悪魔的な魅力をもった笑顔。真意がわからない。

仁は、息のつまった現状を打破しようというクレアのジョークだと思うことにした。だったら、返答のしようもある。

「じゃ、クレアさんと一日デートするってのはどうです？」

その時のクレアの顔を一言で言い表すとすれば、ずばり「へのへのもへじ」だろう。

変な顔をした後のクレアは、体を二つ折りにして笑った。

なんだかバカにされているような……。

「私でよければ、いつでもいいぞ！」

目尻に浮かんだ涙を綺麗な指で拭い、くるりと踵を返してクレアは歩き出した。

「てっきりスケベな事を言い出すと思って、心の準備をしてしまったぞ！」

クレアの肩が笑っている。

——そういうのアリだったのか——。

奥歯を食いしぼり、額に皺を寄せ悔しがる仁。悔しがりながらクレアの後について行く。

しかし、この一件で二人の気持ちちがほぐれた。会話が続く。

「遭難したときは、じっとしてる方がいいって聞いてますよ」

「ハティ山が崩壊した。何時大地震が起こっても不思議でない。そんな場所ですっきりしていたいならじっとしていろ」

それも一理ある。

「山からは十分離れたようですよ。こちら辺で火を起こして煙りでも上げてれば、上空からヘリや飛行機が見つけてくれますって！」

クレアは後ろを見ずに、左手に持った枝をひらひらと振った。

「ヘリとは何だ？ ヒコウキとは？」

「……動力付き飛翔体ですよ！ 空飛ぶ乗り物！」

クレアのニュアンスにかちんと来るものがあつた。

「ほー。貴様のセカイにはそんな怖い乗り物があるのか？ 言っておくが、アルフレイには空を飛ぶなどという馬鹿げた乗り物はないぞ」

あつさりと飛行機を流された。……アルフレイって国は、飛行機も無い貧乏国なのか？

「このあたりでよからう」

クレアが立ち止まった。仁が追いつき、並んで立ってみる。

そこだけ、木々が無かった。ぽっかりと空に向け、穴が空いた空間。

短い丈の下草が一面に生えていて、空が見えていた。見上げれば

解る。今は夕刻。

「さて」

広場の縁に、大きな幹を持つ木が一本、空に向かってそびえていた。

根本に、抱え込んでいた枝をバラバラと落とすクレア。

「今日はここで野営する。設営開始！」

設営開始といわれても、野営経験どころか、テント設営も未経験の仁に何ができようか。ただ、おろおろと腰を引けているだけ。

突っ立っている仁を尻目に、どこからか手頃な石を集め、竈を作り出すクレア。着々とたき火の準備が整っていく。

「あ、あの、僕は何を……」

「うろちよろせず、そこで座ってろ」

ホントのところ、軍人とはいえ女の人に座ってろと言われて、黙って座っているわけにはいかない。森の下草へと足を踏み入れた。

「じゃ、薪でも取りに――」

「じっとしてろ！ この辺りは金獣のテリトリーなんだぞ！」

息を詰めてしまった仁。金獣ってなんだ？ いかにもヤバそうな名称。

「森や山に棲む、体毛の濃い未開人だ。我らエルフィとは不文律で不可侵の関係にあったのだが、少し前から関係がおかしくなっている」

そーっと、草から足を抜く仁。

「ひょっとして、……肉食ですか？」

「田畑を持ってるとは思えんが……この発火剤、性能が悪いな」

クレアさんは、しゃがんだまま、小さな火を大事そうに育てている。

「凶暴な動物ですか？」

「直接戦ったことはないが、小口径の銃では死なないらしい。ああ、そうそう、この天変地異だ。連中の気が立っているのは、……火を見るより明らかだな」

炎が立ち上がった。クレアは、うまいこと言えた顔で満足げだ。

クレアが拾った枝は、どれもこれもよく乾燥していた。パチパチと音を立て、勢いよく燃え上がっていったのだった。

6. あれ？ 遭難？ クレアさんと仁。 (後書き)

ほどよく疲れて、ニンニク充填。

次回「仁君ウイリー！」の巻。

…あ、明日(11/2)お昼upの予定…

7. お姉さんとドキドキキャンプ

人間、火を見るとなんだか落ち着くものである。

仁は、ほっと一息ついた。疲れがどっと押し寄せてくる。

火を見ても落ち着かないタイプらしいクレアは、手を休めることがない。火の番を仁に任せ、森の周辺を歩き回っては、薪を拾っているのだろうか。そそと手を動かしている。

戻ってきたらきたで、救命パックを開き、せわしく手を動かしている。

「クレアさん」

声をかけてみるが、快い反応がない。膝について背を向けたまま、黙々と用事をこなしている。

「肩と足、大丈夫ですか？」

タイミングがそうだったのかも知れないが、小さな紙ケースに伸ばした手の動きがゆっくりだった。そして、首を捻って仁を見る。

なんだか瞳孔が開ききってるように見えるが、たぶん気のせいだ。

「何の問題もない」

生気のない目でひと睨みしてから、何事もなかったかのようにして元の作業に戻り、ごそそと救急パックの中で手を動かしている。

「ほら」

振り返りもせず、小さなボトルを放り投げる。抱かまえこむようにしてキャッチする仁。手にしたものを見る。それは水の入ったボ

トル。

スクリューキャップをねじ切り、水を口に含む。喉が渴いていたことに気づいた。むさぼるようにして水を飲む。

「半分にしておけ。水は豊富な土地柄だが、次いつ手にはいるかわからない。ほら！」

クレアが金属製のマグカップを差し出した。ほのかに黄色いペースト状のモノが、すり切りいっぱい入っている。

受け取ると、魅惑的な甘い刺激が鼻腔いっぱいに広がった。忘れていた食欲。

クレアが安っぽい樹脂製のスプーンを差し出す。

「非常用のビスケットを茹でふやかしたモノだ。柔らかいが、意図的に噛んで食べる」

暖かいのがありがたかった。すでに、かき込むように頬ばっていた仁。ほんのりと甘く、香ばしくて旨味がしつかりある粥みたいな味。

「よく噛めと言ったろうが！」

ドンと片足をつくクレア。眉が鋭角に吊り上がっている。小さくなってモグモグする仁。

「それでいい。では食事開始」

そう言うってから、スプーンを自分の口に運ぶクレア。三口ほどでスプーンを置く。ボトルの水を二口飲んでキャップを閉める。

それでクレアの食事はお終いのようだった。

仁は自分のコップをのぞき込む。まだ半分残っていた。

「クレアさん、僕の分が多いような——」

「本官に太れと言うのか？」

切れ長の目が凄んだ。日本刀の鋭い切っ先のような目尻だった。

「いえ、残さずいただきます」

コップに口を突っ込むようにしてモグモグする仁。それをじっと見つめているクレア。

クレアさん、ひょっとして時分の分を削って……。

つと目線をそらせ、クレアが口を開く。

「シテイに行けば、美味しいものがたくさんある。何が食べたい？
無事に到着すれば手配してやろう」

「おでん」

間髪を入れず答える仁。

先ほどよりは写実的なへのへのもへじ顔をするクレア。

「ないの？ 僕、練り物が好きなんだけど」

「……いや、ある。幸か不幸か、具はほとんど練り物ばかりだがな。
アルフレイは海の幸が豊富だ。練り物だって美味しい。本官は野菜系が好きだがな」

ちよつと誤魔化されたような気もするが、彼女の心遣いに感謝し、舐め回すようにして綺麗に食べ終わった。

「コップとスプーンはそこに置いておけ。後で本官が片付ける」

クレアは、救命パックから取り出した新聞紙より薄そうな銀の布を広げている。

「ツェルトだ。……寝袋とテントがあわさったモノだと思え。薄い
が、完全断熱素材でできている。大気圏突入も可能という怪しい物
だ。潜り込んで寝るがいい」

見渡せば、辺りに夜が迫っていた。星はまだ出ていない。

体が鉛のように重くなっている。クレアさんの好意に甘えて、

ツェルトに潜り込むことにした。

クレアさんが言ったとおり、薄いツェルトの中は暖かった。背中は、もろ地面の感覚だがこれは仕方ない。安堵感に、大きく息を吐く。

「失礼するぞ」

クレアさんがスリリと入ってきた。

仁の顔のすぐ側にクレアさんの顔が並ぶ。よかった、暗くなっても目は光ってない。

……いや！ いやいやいや！

突然の成り行きに、目を白黒させる仁。古い言い方だと同衾。同床とも言うそれをわかりやすく言えば添い寝。眼前十？にあるクレアさんの綺麗な顔。

離れていても伝わってくる暖かい体温。生々しく聞こえるクレアさんの息づかい。

こっこれはっ！

「このツェルトは二人用だ。ならば分かち合ってとうぜんだろう？
それとも本官と一緒に寝るのが嫌なのか？」

仁は真っ直ぐ上を向いたまま、ぷるぷると首を振って否定する。

これはチャンス！

「何だ、やっぱり嫌なのか？」

「違います違います！ 一緒に寝るのは嫌ではありません、という意味表示です。……いやいやいや、一緒に寝たいと言っているのではなくて、あくまでも……そう、枕を並べるという行為に対して――」

「いいから寝ろ！」

仁は、クレアの一言で撃沈してしまった。

しかし、この状況は！ 男子と生まれて十四年。最強最大美的チヤンス！

……体をくっつけて寝るということは、触れあってしまうのは当然の理。ちよつとくらいなら触っても良し！ 事故だよ事故！ これをきっかけにぽぽぽーん！

中二思考全開の仁。手を動かして……。

ゴツ。

堅いのにあたった。

——自分のではない。

——クレアさんのだ。

位置的に鑑みて、これは自動拳銃が入っているホルスター……。いやいやいや、待て待て待て。クレアさんは疲れ切っているはず。ほんの少し待てば、ぐっすり寝入ってしまうだろう。

——それを待つ！

真っ暗な闇の中。完璧な作戦。見よ、ニンニクの威力！

「眠れなくても目をつぶっておけ！ 就寝！」

起きていることバレバレじゃん。とりあえず目をつぶって……。

目を開けたら、明るくなっていた。

一般的に、朝が来た、という太陽系規模の現象。

「あ？ あれえー？」

もちろん、クレアさんは隣で寝ていない。妙に頭がスッキリしている。

「目が覚めたか？ 肉が焼けたので、ちょうど起こそうと思っていたところだが、匂いに釣られて起きてしまったのか？ いやしいやつめ！ 体は正直だな」

一生の不覚！

もう一度言う。一生の不覚！

握りしめた拳をこれでもかと地面に叩き付ける。もっと叩き付ける。何度も叩き付ける。

だのに、お腹が鳴った。いい匂い。肉が焼ける香ばしい匂いが、あたりに漂っている。

どこで見つけたのか、太い丸太の中程が燃えている。

大なり小なりの木の枝に刺した肉から、油系の煙が上がっていた。胃袋が肉を上納しろと、多大なる要求を出している。

情けない話だが、ごそごそとツェルトから這いだした。

「体は痛くないか？」

クレアさんが聞いてくる。手や足を動かしてみるが、すっかり痛みはとれていた。

「一晩寝たら、直った」

ぐっすり眠ったのがよかったのだろう。悲しいけれど……。

「クレアさんはどうなんですか？ 肩、痛くないですか？」

微動だにしないクレアさん。金の瞳孔が開いているような気がするが……。

「悪化してるんですね？」

さらに微動だにしないクレアさん。

「クレア——」

「やかましいっ！」

クレアは、ぐわわっと回り込みながら立ち上がり、無事な左腕だけを振り回す。

「右腕は全快した！ 見るがよい！」

言ってクレアは、勢いよく右腕を振り上げた。

ぴったり肩の高さまで。

「いやいやいや、それ以上あげないと」

仁のつつこみに対し、腕をあげるクレア。一センチだけ。

彼女はいつも通りポーカーフェイス。ただ、額に大きな汗の粒が浮いていた。

「やっぱり痛いんだ」

「やかましい！」

更に二センチ、五センチ、十センチと右腕をあげていくクレア。青、赤紫、青紫と変色していく顔色。数を増す汗の粒。噛みしめた歯と歯の間から火花が散りそうだ。

「いや、ちょっと、無理しちゃ駄目だよ！」

「ふははははっ！ そーら、なんともないぞー！」

腕の角度は、仰角にして四十五度を超えた。

だらだらと流れ落ちる脂汗。見えていて気の毒だった。

「解りました！ クレアさんの腕はなんともないです。だからもう許してください！」

泣いて謝る仁。気迫勝ちのクレア。

「はあはあ。わかったのならツェルトをたたんでおけ。丁寧にな。」

「はあはあはあ」

血走った目を仁に向けるクレア。美女の血走った目って初めて見た。

クレアさんの命令に逆らうと撃ち殺されそうな気がしたので、仁は素直に従い、ツェルトを折りたたむ。

「たたみ終わったらこちらに来て座れ。朝食の用意ができています。先ほどから焼いている肉から、汁がこぼれ出ている。食べ頃だ。」
「夕べ、罌を仕掛けておいたら、今朝ウサギモドキが二匹かかっていた。日持ちしないからできるだけ腹に詰め込んでおけ！」

「罌ですか？」

そういえば、夕べ下草でゴソゴソやっていたのは罌を仕掛けていたためか。

「本官はトラップ関係の教官も務めている。ほれ！」
クレアに肉を手渡される。

「朝食、開始！」

合図と共に、肉にかぶりつく。ジューシーで柔らかい。なおかつ臭みがない。

口いっぱい頬ばってもぐもぐと口を動かす。豚でもない、牛でもない、まして鳥でもない。まさにウサギ。ウサギ肉など食べたことないが……。ウサギモドキという単語が気になるのだが……。

フワフワの白い毛が目に入った。

草むらの上に、つぶらな瞳をしたぬいぐるみのように可愛い動物の頭だけが……。

視線を元に戻して、食事に集中する。

あっという間に二本を平らげ、三本目へ手を出す。と、手が柔ら

かいモノに触った。クレアさんが肉に伸ばした手だ。

「あ、ごめんなさい」

ドキドキと鼓動を高めつつ、あわてて引っ込める。反対側の肉に手を伸ばす。こちら手も手が柔らかいモノに触れた。

「ごめんなさい！」

眉毛を下げて謝る先に……毛むくじゃらの小さい人？

見た目、二歳児。明るい金色の目……。

バサラに伸びた金髪。頭頂で存在を主張する三角に尖った耳がピコピコ動く。ふさふさした犬系の尻尾。金色の体毛は、か細くて長い。……顔と腹部だけ毛に覆われてない。

それが、あーん、と小さな口を開ける。短いながら尖った犬歯が見える。

そんなちっこいのが、ちっこい手に持った肉をワイルドに頬ばった。にこにこしながら。

ほっぺたがマシユマロみたく柔らかそう。あ、こっち見て笑った。うわっ、可愛い！

……で？ あんた誰？

7. お姉さんとドキドキキャンプ（後書き）

すみません、やっぱザブタイトル変えます（汗

どこのどなたか存じませんが、毎回毎日3桁のアクセス&ユニークありがとうございます。明日（11/3）もがんばってUPします！引き続き、誤字脱字・句読点句読点・用法等の間違いご指摘受付中！

8. 襲撃、金獣！

「撤収準備！」

クレアさんが叫ぶ。靴底で火を消しにかかる。すでにバックパツクに手を通している！

「え？ なに？ なに？」

おろおろしてるだけの仁。反応が悪い。

「そいつは金獣の幼体だ！」

ホルスターから拳銃を抜き、第一弾をチャンバーに送り込むクレア。戦闘準備が着々と進む。

「近くに成体がいるはずだ！ 全方位監視しつつ撤退開始！」

この子は可愛いけれど、金獣。それは獰猛な野蠻亜人。狼男の眷属？

仁の脳裏に、とある映像が浮かぶ。六連発を持った現代人が、槍を持った三十人以上の戦闘的裸族に取り囲まれている図。明らかに弾の数より、敵の方が多い。

その後、粗末な、それでいて頑丈な木の檻に入れられ、目の前で大きな釜が茹で上がっていく。スープは鶏ガラ？ いえいえ、人の――。

いやいやいや！ ぷるぷると頭を振って、嫌な考えを放り出す。

とはいうものの、足が震えだした。体が硬くなっていくのが自分でもわかる。

「ど、どうしようクレアさん！」

「二時の方向！」

クレアさんが低く小さく警告を発する。

二時の方向って……時計の二時？

仁は右斜め前に首だけをめぐらす。木陰に、なにやら動く影が……。

飛び出してきたーっ！

「イーマスタート！」

なんか叫んでる。こっちへ走ってる。筋肉質の、金色の、大柄の、女の、獣耳の――。

全力で間違ったイメージを沸騰させて具現化したケモノ耳、ケモノシッポをもったムキムキの女の人だ！

「七時の方向！ 走れーっ！」

その場で回れ右する仁。無邪気な笑顔を見せてる金獣の幼体が目に入った。

銃声が立て続けに三発。心臓が三回跳ね、血圧が三段階上に上がった！

「ワー・ツー・ウー」

幼体がなにやら喋っている。何で聞こえるかという、小脇に抱えていたからだ。

人間、地震や火事など、緊急事態により簡単にパニック。そんな時、金庫や通帳ではなく、身近にある枕を持って逃げることもある。

仁がそうだった。目の前に突っ立っていた小さな子を思わず小脇に抱えてしまったのだ。

「あわわわわ！」

ドタバタと、効率の悪いランニングフォーム。アンド、金獣の幼体であるチビッコを小脇に抱えたまま、真っ直ぐ森に向かう仁の背に、クレアの叱責が飛ぶ。

「こら！ 幼体は置いて走れ！」

身の丈三メートルの人狼。一クラス分の人数に囲まれる図。木の檻。茹で上がった釜。次々と光景を脳裏にフラッシュバックさせている仁。彼に、クレアの声は届かない。

立ち木の中に、一箇所開けている場所があった。獣道だろうが、かまわない。そこしか入れる場所がない。一目散に駆け込んだ。なんとか逃げのびた。

クレアさんが追いつけるように、ゆっくりと歩いて、静かな森の奥へ分け入っていく。

いま右の方から何か音がした！

木の枝が揺れている。金獣のちびっこを胸元に抱き構える。

「鳥？」

赤と青と黄色が派手な鳥が、羽ばたいていた。前後左右を見渡しながら、及び腰で歩いていく。

また右から音がする。こんどは草むらだ。木々の下草が揺れていた。

「ウ、ウサギモドキ……かな？」

思わず、ちびっこを抱く手に力が入る。

「ふぎー！」

抗議の声上がる。

「あ、ごめん！」

謝ってばかりの仁。でも、ちびっ子から伝わってくる体温が、仁を落ち着かせていた。

「ほーっ」

深呼吸のような深い溜息をつく仁。

左で草の揺れる音がした。またウサギモドキー。

右で、左前方で、右後方で、かすかな音が立て続けに！ 何かいる！

左目の端が動く影を一つ捕らえた。右目の視野に複数の動く影。こんどは左の視野にはつきりとした人影が！

いつの間にか、一クラス分の気配が蠢いていた。

——これはヤバイ！ そうだクレアさん！

発砲音が三つ聞こえた。三連射はこれで三回目。彼女の癖だろうか？ ……でも、かなり遠い。

クレアさん一人なら、なんとかできるだろう。でも僕の場合……。

崖っぷちとはこのこと。これは現実。目の前に液晶ディスプレイも四方向レバーもない。昨日までの現実はどこへ行ったんだ？

仁の首筋の産毛が、全部逆立った。と、思ったら森の奥へ向かって走り出していた。

それをきっかけとし、仁の後方で金獣たちが一斉に立ち上がる。

「ぎゃーっ！」

悲鳴を上げる仁。ざっと二十四の金獣が、獣道に躍り出たのだ。

「く、来るなー！ それ以上近寄ると、この子の命はないぞー！」

シッポを嬉しそうにバタつかせているチビッコを正面に抱き直す仁。人質のつもりである。どうやって素手でチビッコに危害を加えるつもりだろうか、という疑問は置いて、どうか未開人の金獣に、人質の概念がありますように！

らんらんと金色の目を輝かせた金獣が、次々と躍り出る。完全に仁に興味がある目だ。

人質の概念なし！

仁が飛び出したのは、獣道の果て。森の広場。ずらりと金獣たちが輪になった、その真ん中に飛び出した。

「あわわ」

急いで回れ右。だが、森への入り口は追いかけてきた金獣たちであふれかえっていた。

ふと――、仁は、金獣たちの、ある共通点に気づいた。

みな、一様に金色の目。くすんだ長い金髪。毛皮や簡素な繊維でできた袖無しの貫頭衣は横隔膜のあたりまでの短い丈。長く尖った耳。ふさふさの尻尾。顔と腹部以外、全て毛足の長い金の体毛が覆っていた。

あと、全員の目が何かの欲に反応し、異様にギラついていること。

それともう一つ。

「メス……いや、全員女の人？」

とうとう金獣たちの数は百を超えた。

見た目十代から二十代まで様々あれど、みな一様に出るところは出、引っ込むところは引っ込んでいる。クレアさんとはまた違うタイプのナイスバディ。毎日走っていそうだしね！

そういえば、このチビッコも女の子っぽいし……。

「なぜ女ばかり……はっ！ アマゾネス？」

伝説の戦闘民族アマゾネス。長い槍を標準装備、弓にも長けている。男と見るや、無慈悲に攻撃を仕掛ける。

粗末だが頑丈そうな木の檻。目の前で茹で上がる大きな釜……。チビッコを抱く手に力が入る。

「人質ーっ！」

仁の叫びを吉祥に、一斉に飛びかかってくる金獣たち。

何本もの腕が、手が、チビッコを抱いたままの仁を捕まえ、自分たちの頭上に持ち上げる。おみこし状態のまま、連れ去られていく。

結局人質の効果は無し。仁が後味の悪い思いをするだけであつた。

8. 襲撃、金獣！（後書き）

さあさあ、人気のネコ耳の登場ですよ！　ちよつと違和感を感じますが、ネコ耳ですよ！

4桁もののアクセスありがとうございます！　想定は2桁前半だったのに、嬉しい限り。これもひとえに皆様のおかげ！

9. ゴールデン・ビースト・ソルジャー

どんどこんどこどん！

リズムカルな太鼓の音。

太鼓を叩く面は動物の皮でできている。ちなみに和太鼓は牛の皮でできていて、雄と雌とで音が違うという。

……なにが言いたいのかというと、彼女たち金獣は、狩猟の能力を持っているということ。

仁は、あのあと、長い時間をかけて金獣たちの本拠まで拉致されていたのだ。

「ウー・ヒー」

チビ金獣を抱いたまま、広場に座らされている仁。変な声を上げながら正座している。

木の檻が無いだけましであろうか。

そのかわり、彼の周囲を槍や弓で武装した、ナイスバディのお姉さん達が二重三重に配備されていた。首長親衛隊ってヤツでしょうな、ハッハッハッハッ……。

動けばやられる！

さらに、目の前の祭事広場中央では、二つの釜が焚かれていた。二つともドラム缶サイズ。色が悪かった。金属のようにも土器のようにも見えるのだ。

そんなことはどうでもよろしい。

問題は……。

片方の大釜に野菜やら、肉片やら、岩塩やら、なんじゃかんじゃ

表現不可能な食材がバケツリレーでドボドボ放り込まれていること。もう片方の釜は、ただ湯だけが沸かされているらしいこと。こちらの釜が心配だった。

頃合いを見計らっていたのだろうか、年かさの女性が釜の近くにあらわれた。顔に素朴なペイントをしているが、それでも美しい金獣。

明らかに他の金獣たちと違ったオーラを持っていた。

「ワカマスタエ・オウ・ヨホ。アシア・ネ！」

仁を指さし、天を指さし、呪文のような言葉を唱える。

さしずめ、シャーマンといったトコロでしょうか？ 悪い方に悪い方に転がっていく予感に、仁の全身がこわばる。

「ワマスタエ！ エ！」

シャーマンらしき金獣の、短い呪詛っぽいのがいきなり最高潮の盛り上がりを見せた。

「エ！」

広場にいる全金獣が腕を突き上げ唱和する。

「ワマスタエ！」

「エ！」

ギッラギラした百の視線が仁に突き刺さり、唱和が続けられた。

「エ！」

チビッコも喜んで声を張り上げている。

いよいよ釜に放り込まれるのか？ 予感としてあった生命の危機が、現実味を帯びてきた。下痢にも似た、冷たい痛痒感が脊柱内髄液に走る。

「うわーう！」

悲鳴を上げたのは状況に変化があったため。

五体の金獣が仁の眼前に集まった。彼女らの顔は笑っている。でもいかにもといった作り笑顔。目が笑っていない。

それぞれ二対計十本の腕が、うねうねと仁に伸びてくる。絶体絶命！

「クレアさん！」

叫んだつもりだが、喉の奥に粘っこい痰が絡んでいて、声が出ない。

「ヤーフー！」

ザワリとしたウェーブが金獣たちの間に走る。みな一様に釜の向こう側に首を向ける。ここからだ、仁には金獣たちが邪魔で見えない。でも、誰かがこちらに向かって走っているのが足音でわかる。

「ク、クレアさん！」

精一杯首を伸ばし、視界を確保する。

確固たる足取り。金獣たちの群れを割って現れたのは――金獣だった。

血だらけの。これも女の金獣。

体のあちこちから血を流している。いや、血を流した後がある。その数五カ所。

もう一カ所、右目に巻いた包帯風布切れが真っ赤だった。

これで合計六カ所。クレアさんが発砲した弾丸の数と合う。

見覚えのあるタンクトップ風貫頭衣。最初にキャンプ地を襲撃した金獣。

彼女がここにいるということは……。

「こ、これは、まさかクレアさんは……」

仁、体の震えが止まらない。

傷だらけの金獣の目的は仁らしい。走るのをやめた血だらけの金獣は、こちらに向かって一直線に歩いてくる。仁の顔をひしと睨んで。口元に肉食系の笑みを浮かべて。

「ニケ」

チビッコが傷だらけの戦士を指さす。

「ニケ？」

どうやら、戦士の名前らしい。

仁の眼前まで来ると、今度はシャーマンに首だけ向け、大声でなにか主張した。

「チセ・ワヒソ」

なんか、こう……、戦果の第一殊勲者は私である。最初の一口は私に権利がある。とても主張しているのだろうか？

シャーマンは頷き、広場の方を向く。

「カ・ニケ・メ・マスタ・ナホ」

その言葉に我が意を得たりとばかりにニヤつくニケ。どうやら主張は認められたらしい。

満足げな笑みが浮かんだ顔を仁に近づけてきた。六つの傷跡が生々しい。

……六発も打ち込まれて痛くないのだろうか？

血が乾いた傷口を見て、ぼやっと考えていた。

銃で撃たれても何ともないなんて……。

ちらりちらりと傷を見る。

内、左腹筋の傷口に二本の指が伸びた。ニケの指だ。

そのままグリッと傷口に指を突っ込む。出血が始まった。

「ホアウッ！」

悲鳴を上げるニケ。そりゃ痛いだろう。眉をハの字に変形させたまま、傷口の中で指をかき混ぜる。

その表情に艶めかしさを感じてしまった。こういう時に発現するこの感情は危ない。

仁が顔を背けようとした時、ニケの動きが止まった。指をそっと傷口から出す。

二本の指に挟まれていたのは、先端のひしゃげた弾丸。

乾いた音を立てて地面を転がっていく。仁はそれが止まるまで眺めていた。

「ワロリ？」

はっと顔を上げる。凄まじい気迫を放つニケ。迫力ある笑みを顔に浮かべる。

「あは、あはあはあは」

仁は、笑うことで答えとした。どうせ、『お前の連れ合いに撃たれた弾丸だ。きさま、覚悟はいいか？』みたいなことを聞いているのだろうが、万が一ということもある。とりあえず愛想笑いを張り付かせておくことにした。

「ワ・イロリ！」

高々と腕を振り上げ勝利宣言するニケ。何の勝利宣言だろうか？
なににせよ、今の愛想笑いが引き金となったのに間違いない。

「ニケ！ ニケ！ ニケ！」

全金獣による唱和が延々続く。誇らかに胸を張るニケ。けっこう大きな胸……いやいやいや。この場面でナニ平和なこと考えているのか！

「ナワコ！」

血まみれの手で指し示すニケ。なぜか、どや顔。拍手と笑いが湧き起こる。

周囲を囲む金獣アマゾネス達が仁を促す。目的地は、あの大釜。

両脇に手を回され、立たされる。肩に手を置かれ、押されて歩いた。大釜の前で、とても幸せそうな笑みを浮かべるニケ。

釜の底から、ときどきはみ出す炎が熱い。

その釜に梯子がかけられた。

広場の金獣たちが静かになった。あれほど騒がしかった声が消えた。空気が堅くなる。

だっ、だめだ！ 死ぬ！ 殺される！

琴葉ちゃんは、父さんや母さんは……。

「クレアさーん！」

涙声で叫ぶ仁であった。

9. ゴールデン・ビースト・ソルジャー（後書き）

クレアさんは、メインヒロインの仁を救えるか?! ……なんか違う感じがするが違和感なし!

次話も連投の予定です!

10. お姉さんとダイブ。

仁が叫んだ・その時！

自然界ではけっして聞くことのできない音が、広場に響き渡る。それは、銃声！

音がした方角を向く仁。右側だ。金獣たちも同じ方向を見ている。今度は轟音がした。より重い音だ。反対の左側で。

右がフェイクで左が本命か！

左の森の一角が崩れ、土煙が立った。爆発的に紅い炎が踊る！

「ミヒ！ シエルファイ・ル！」

その場にいる金獣達が血にはやっている。ほとんどの金獣が、火を出した森に向かって走り出した。

これだけの数の金獣相手に、どうやってクレアさんは戦おうというのか？

トラップの教官と言っていた。サバイバルの教官だとも言っていた。今までこっそり準備をしていたのだろう。だけど……。

だけど、ニケはこの場を動いていない。火の出た森を睨み付けている。親衛隊の方々も森の方に向け、手にした武器を構えていた。

クレアさん一人でどうやってこの窮地を切り抜けようというのか？ 金獣の大群を向こうに回し――。

変化がおきた。

大釜二つがひっくり返った。

もうもうと上がる湯気。水煙と言っているかもしれない。野菜と肉を煮込んだスープの美味しそうな香りが漂う。

「走れ！ 九時の方向！」

煙の中からクレアさんが飛び出し、仁の体を背で押した。何のことも一瞬理解できないでいる仁。

ニケも親衛隊の金獣も呆然としている。今の今まで気づかなかった。反対の森ばかり見ていたからだ。

「シチ！」

いち早く我に返ったのはニケだった。猛然とクレアに襲いかかる。クレアは両手で拳銃をホルドしている。

ニケの残った目を見たまま、右太ももに銃弾を撃ち込んだ。もんどり打って転がるニケ。

「走れ！ 馬鹿者がっ！」

背後から、クレアさんの声が飛んだ。脊髄反射で走り出す仁。

「あの大きな木の右から、森に入れ！」

「え？ 右？ 右？」

急に言われて、左右の区別ができる人の方が少ない。仁も大多数の方だった。

「お箸を持つ方、だ・ろ・う・がっ！」
そう言われた方が早い。

クレアさんが生きていた。助けに来てくれた。窮地を脱した。いや、まだだ。でもクレアさんと一緒なら、きっと助かる。そん

な感情を混ぜこぜにして、大木の右手に突っ込んだ。

クレアは森に入る直前で振り返り、もう一発撃った。金獣たちは、すぐ後ろまで迫っていたのだった。

発砲ののち、大木の左側から森の中へとジャンプしたクレア。

クレア憎しとばかりに続いて、左から森に入る金獣たち。その足下がすくわれた。

親衛隊の金獣三体が逆さ宙吊りになる！

「その小道の左、……お茶碗を持つ側に沿って走れ！」

左急速走行。

また背後から悲鳴が聞こえる。さっきより悲痛な悲鳴だった。どんなトラップが仕掛けられていたんだろう？ 気になる。

「血が苦手なら後ろを見るな！」

後ろを見ずに走る仁。今日はよく走れている。いつもより腿が高く上がっていた。

「山や森は金獣だけの物ではない。連中の油断はそこにある。ふふふふ……」

後ろから聞こえるクレアさんの声が笑っている気がするが、あまり考えないことにした。

「その倒木の上を走れ！」

「下をくぐれ！」

様々な指示が飛ぶ。いったいどれだけ周到にトラップを用意したんだよ！

都度、背後から上がる悲鳴。

気のせいかな、だんだんと声に悲壮さが増してきたような……。

だが、背後より迫る声や足音は、いっこうに減らない。むしろ数

を増している。

「そりゃそうだ。金獣の一部族を全て敵に回したのだから」
大きなストライドで走るクレアさん。ミニスカート無視？

「それはそうと、貴様、いつまでその子を抱いてるんだ？」

「はっ！」

仁は、小脇にチビッコを抱えたまま全力疾走している。まったくの無意識だった。

「いや、これは……」

「その角、直角にお茶碗！」

定点左九十度回頭する仁。

「うおっとおー！」

そこは崖。目もくらむような高低差。眼下には、白波を立て轟々と流れる大きな川。

ああ、これ、見たことある。

小学校最後の春休みの深夜映画だったっけ。

明日に向って撃て！　って西部劇で、ブッチとサンダンスが、追っ手から逃げるために滝壺に飛び込むシーン。サンダンスは金槌だったんだよな、ハッハッハッ！

……。

「まさか、クレアさん」

「察しがいいな」

口の端に冷たい笑みを浮かべるクレア。目がとっても危険。

仁の、そして男子の唯一体外に出ている内臓器官が二個、キュッと縮み上がった。

「その子はおいていく方がいい」

そういえばまだチビッコをダッコしたままだった。

遠隔操作された鉄人の様に、ギコギコした動きでチビッコを降ろす。チビッコは四つんばいで毛をプルプルさせた。

四つんばい？

「金獣の幼体は四足歩行だ。それより、覚悟はいいか？」

クレアはバックパックから、ポーチを取り出し二の腕に巻き付けた。

そして、残ったバックパックを放り投げた。そうそう、飛び込むには邪魔になる。

「ちょっと待って、ちょっと待って！」

「どーん」

チビッコが仁の足下に体当たりした。

……なにゆえ？

声を出す余裕など無い。崖の先端で両手をぐるぐる振り回しバランスを回復させる。何とかギリギリ耐えられそうだ。

「ほう！ 頭のいい幼体だな。どれ」

仁の額をチョンと押すクレア。

「あーっ！」

バランスを崩した仁。文字通り、大の字に両手足を広げ、崖を下していく。

何回転目かで見上げた上空に、飛び込みスタイルで宙に浮くクレアさんと、ゴムボールのように体を丸めて飛んでいる嬉しそうなチビッコを見た。

ふと無くなる現実感。すぐ後に続く、雪崩式バックドロップによる着水のショック。背骨が軋んだ！

水中に潜っているのは頭のどこかが理解していた。ただ、上下左右がまったく解らない。手と足がどこにあるのかも解らない。水中にいた。と思ったら顔が空气中に飛び出した。

次第に水中にいる比率が高くなっていき、次第に頭の中が白濁していった。だんだんどうでもよくなっていき……。

いつしか意識が薄れ、ついに記憶が途切れたのだった。

10. お姉さんとダイブ。(後書き)

男性は身体が資本だと思う今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか？

次、明日(11/4)お昼にアップ予定！

でもそろそろ、1日2回は辛くなってきました。

もう無りっポ(略)

11. 深紅の唇

——変なところに水が入った！

空気がある。川原の砂利が痛い。

仁は、一瞬でそれらを認識していた。

次に、体が自己防御のために反応する。体をエビのように曲げ、激しく咳き込んだ。

びっくりする量の水が、気持ちよく口から飛び散る。これ全部気管に入ってたのか？

「気がついたか！ もう大丈夫だ！」

クレアさんの声だ。無事で良かった。

何度か咳き込んだだけで楽になった。気管から水はすっかり出たようだ。

「クレアさうワばっ」

クレアさんが手にした布切れで、口を乱暴に拭われた。仁の口元を確認するクレア。布切れはハンカチだったのだろ、面を買えてもう一度唇を拭われた。

「よし！」

クレアは、仁の口を確認してから、ハンカチを内ポケットにしまい込んだ。

拭われた時から気づいていた。ハンカチに赤い色がついていたのを。

血かと思ってどつきりしたが、すぐ違うことに気づく。血に比べ

色が鮮やかなのだ。

そう、例えるなら口紅の赤……。

「はっ！」

人工呼吸。マウス・ツー・マウス。唇と唇。直接キス。

まだ唇にナニが残っているはずっ！ 舐め回すなら――。

「ミアーウ！」

チビッコが顔面に飛びついてきた。仁の唇を舐め回す。

「ナニをするかな！ このチビッコがつ！」

怒り心頭。せっかくのナニが、綺麗さっぱり無くなってしまったではないか！

真っ赤な顔をしてチビッコを振り回す。きゃっきやうふふ、と喜ぶチビッコ。

「どうやら、しばらくは追ってきそうにないな」

帽子の収まり具合を確かめながら、川上を見るクレア。髪から滴り落ちた雫が、細い顎のラインを走る様が艶めかしくて……こう……。

続いて、拳銃をホルスターから出しチェックする。

遊底が後退したままの銃。残弾数ゼロだ。

クレアさんが、いきなり胸のジッパーを開けた。

柔らかそうな丸いふくらみを包むレースの白が眩しい！

「ク、クレアさん！ なななな、ナニを？」

クレアさんは開いた胸元に手を差し入れ、まさぐっていた。

仁は左右を見た。右手は崖が空までそびえ立つ。左手は轟々と音

を立てて龍がごとく川が流れている。誰もいない。

これはアレじゃないのかな？ お誘い？

疲れによる精神レベルの低下。血中より抜けきれないアドレナリン。クレアさんの銃は弾がない。

ブチツと音を立て、仁の理性が吹き飛んだ。レスリングのタックルの体勢。

「クレアさーん！」

ガチリ！

額に冷たい金属が当たる。銃口だ。ただし――。

「それ、弾入ってませんよね？」

仁のエヘラ笑いに呼応して、クレアが鋭い眼光をもって笑う。時々クレアが浮かべる、笑ってないのに笑っている笑顔。

クレアが胸元から手を抜いた。指先に挟んでいるのは尖った……。

「弾丸？」

クレアは排莢穴より一発だけの弾をチャンバーに押し込んだ。この拳銃って、そういう装填ができるんだね。

「そうか、試し打ちして欲しいのか？」

ブンブンと首を激しく振る仁を睨みながら、クレアは銃をホルスターにしまう。

「今から思えば、貴様の足下に打ち込んだ三発。もったいなかった。特に前面に打ち込んだ弾だが、よく跳弾しなかったものだ！」

座ったままでもピンと伸ばした背筋。後ろ姿が凛々しい。

ふと思い出して、ポケットから携帯を取り出す。ぐっしより濡れていた。お亡くなりになった模様。とりあえず、バッテリーだけ外しておく。運が良ければ復活するだろう。

「直ちに出発する。用意はいいな？」

クレアは胸のジッパーを上げ、魅惑の展望をしまい込んだ。

「じゃ、チビッコとはここでお別れだね」

「ミア？」

二足で立ち上がっても仁の股下にしかこない頭をなでなでする。

「金獣の幼体は連れて行く」

「え？」

意外な答えがクレアから帰ってきた。

「何処ともわからぬこのような谷間に、金獣とはいえ幼児を置き去りにはできない」

言われてみればその通り。

「万が一、金獣たちが追ってきた場合、人質や足止めに使えるかもしれないし」

鬼畜！

「しばし待て」

太ももの包帯に手をかけるクレア。……血の滲みが大きくなっている。

いきなりしゃがみ込むクレア。こっち向きだ。まったく無防備だったのでナニ的なものが丸見え。あわてて後ろを向く仁。

……いや、別に自分が後ろを向く必要はないな、と思い返し回れ

右。

テーピングよろしく、太ももを堅く縛り上げてトントンしている立ち姿のクレアがいた。

「だいぶ時間を食った。金獣たちに追いつかれる前に出発するぞ！」
両肩を怒らすクレア。何事もなかったかのように歩き出す。

「ああ……」
両肩を落とす仁。猫背のまま後に続いたのだった。

……、どうにもいけない。

クレアさんのパンツを見損ねた事ではない。

気力が消失している。体がだるい。背中が痛い。首筋が腫れている。何度か胃の中身を戻している。

もともと体の強い方ではなかった。

我が身の事や琴葉の事もあって、精神的に参っていたのかもしれない。それよりも超常現象空間をくぐり抜けたことによる、全身細胞へのダメージがここに来て出たようだ。

歩き出して程なく、体が重くなってきた。

たぶん発熱している。それをクレアさんに伝えるのもめんどくさい。ただ足が動いているだけの状態。倒れて眠りたい。

幸いにも、ここアルフレイとクレアが称する大地は、綺麗な湧水と小川が豊富だ。よって飲料水には事欠かず、喉の渇きだけは癒せる。それだけが唯一の救いだった。

緑の間から日の光が差し込む様は、まるでエンジェルラダー。気温は低くない。高くもない。そこかしこに小川や泉が点在する割に、湿度が高くない。実に快適な気候。

エデンといっても過言ではないだろう。

ただし、発熱していなければの話。今は天国のような自然より、薄汚れた寢床が欲しい。

「ミア！」

仁の前を歩くチビッコが、心配そうに見上げている。

「……大丈夫だよ」

粘っこい声が出た。

「ミアちゃんは……元気だね」

適当な名前を付けて金獣の幼体と呼ぶ仁。

ミアと呼ばれることになった幼体は、にっこり笑った。柔らかそうなほっぺがまん丸い。

クレアさんは……気づかないのか、気づかないふりをしているのか、こちらに絡もうとも、見ようもしない。

冷たいなあ……。あれ？

クレアさん、杖持ってたっけ？

利き腕は右のはず。だのに左で持っている。

右腕の、肘から上が動いていない。

そういえば肩を痛めていたっけ……動かないのか？

体も傾^{かし}いでいる。右足を引きずってる。太ももの怪我が酷そうだ。

「クレアさん……は、なんで軍人になったんですか？」

いきなり体の具合を聞いても、はぐらかす人だ。仁は遠回りしてみた。

「……いろいろあるが、主に自分を鍛えるためだ」
これ以上鍛えたら大変なことになると思う。

「なんで陸軍に？」

「……母が海上軍の軍人だったのでな、本官は陸上軍に入った。海上軍に入るとどうしても母に甘えてしまうのでな」

お母さんがいたのか……。いやいやいや、親がいて当然だよな。

「じゃ、お父さんは？」

「存在しない」

間髪を入れず答えるクレア。これは、いけないことを聞いてしまったようだ。

「あの、すみません」

クレアは答えない。

「クレアさん、昔は弱かったんですか？」

「弱かった自分が情けなかっただけだ。……もう聞くな！」

クレアさんは小さな藪をこぎ出した。

「体、大丈夫ですか？ えーと、足と肩？」

立ち止まるクレア。振り返って複雑な表情を見せる。

「……人のことより自分のことを心配しろ」

藪こぎが終わると岩場に出た。少し前から地面の傾斜が緩やかなものとなっている。

苔むした大きな岩を迂回すると、チロチロと清水が流れる場所に

出た。

珍しく立ち止まったクレア。後ろを歩く仁に振り返る。

「しばし休息を取る。だが、立ったまま休憩だ。横になると二度と立ち上がれなくなるぞ」

寝ころばうとアクションを起こしかけた仁。すんでの所でとどまった。

岩に手をかけ、もたれる事にした。

ミアが水面に顔を突っ込んで飲んでいる。

水の流れを指さすクレア。水を飲むアクション自体がめんどくさかったので、首を振って断った。

「歩き続けたかいがあつて、だいぶ高度が下がった。そんなに時間をかけず救助隊と合流できるだろう。もう少しの辛抱だ」

仁の隣で岩に体を沿わせるクレア。左手で帽子を取って、同じ左手で額の汗を拭う。

——クレアさんの髪の毛って、青みがかった銀なんだな。あの額のクリスタル、汗を拭くのに邪魔にならないのかな？

そんなことしか考えられなかった。

仁は今、横になって眠ることを最優先事項と考えている。

そのためにアルフレイ軍が編成した救助隊に早く拾ってもらいたかった。

——違う！ 琴葉ちゃんを搜索するために、軍組織と合流するんだった！

ずっと前から坂は緩やかになっていた。こうしている次の瞬間に

でも救助隊と鉢合わせできるかも知れない。

仁は、背筋を伸ばした。

齒のくいしばり方を覚えたのだった。

11. 深紅の唇（後書き）

人工呼吸はお約束！

二人きりのサバイバルももうすぐ終わり。
次話も連投します！

12. アルfrey・アーミー（さようなら、クレアさん）

「行きましょう」

仁は、体を預けていた岩から離れた。途端、体が崩れ落ちた。

「あ、あれ？」

体が動かない。うつぶせになったまま。顔を上げようとしたが首に力が入らない。

「仕方ないな」

クレアも岩から離れた。彼女も弾みを付けないと動けないようだ。

二の腕に巻き付けたポーチから、アルミ色のケースを取り出した。蓋を開けるワンアクションの後、取り出したのは、銀に光る長い針を持つ注射器。シリンジ内には、冷たい色をした黄色い液体。

それからのクレアさんは行動が素早かった。

仁の尻を左手で固定。逆手に持った注射器をノーモーションで突き刺す。

「げげぼっ！」

仁の悲鳴にお構いなく、プランジャを押し込む。中の液体が仁の体内へ消えていく。

「前のより強力なクスリだ。ちょっとアブナイ系の薬だが、薬害の報告はない。安心しろ」

仁はビクンビクンと二度三度痙攣。やがておとなしくなる。そして再び動き出す。

「ホあーっ！」

飛び起きた仁。血走った目でクレアに飛びかかる。元氣の使用法を間違えたようだ。

迎えたのはクレアの回し蹴り。

再び倒れ込むが、起き上がらない。動かないのは銃口が額にポイントされていたからだ。

「どうだ、落ち着いたか？」

冷めた目をしたクレアが、ゆっくりと撃鉄を上げた。

風もないのに、木々の触れあう音がしたのはその時。

クレアが左右に気を配る。仁は立ち上がって耳を澄ませる。

音がする。人の気配がする。後ろの方！

「救助隊が来た！」

喜色満面の笑みを浮かべ、振り返る仁。

「……後ろから？」

クレアは躊躇した。

音がする。右から、左から。扇形に、取り囲むように。

「違う！ 救助隊が後ろから来るものか！」

木々の間から見えるのは、金の瞳と金の髪。

姿を見せたのは、金獣の集団。先頭で飛び出してきたのは片目のニケ。雄叫びを上げる！

「金獣だ、走れ！」

一発しか弾の入っていない銃を構えるクレア。背中で仁を押した。

安堵から緊急事態へ急転直下。一気に体を駆けめぐるアドレナリン。

仁は走り出した。やっぱりミアを両手で抱いて。

波のように押し寄せる金獣の大群。

注射の効果で体に疲れを感じないのに、足がもつれる。腕を捕まれた。クレアさんに。

クレアさんの左手が仁の腕をつかむ。力強く引っ張られた。この人、足の怪我が酷いはずなのに……。

「ナマ！ マスタコレ！」

後ろから聞こえてくる声が、物音が大きくなる。薄暗い森の中、恐怖が背中を撫でる。

踏み込んだ水たまりが足を引っ張る。乾いた木の枝が音を立てて碎ける。

金獣たちが手を伸ばせば、仁の襟首に届くだろう。首の後ろの毛が逆立つ。クレアに引っ張られる腕が痛い。

いきなり周りが明るくなった。

足元に感じる喪失感。空中？ 接触。転がる。着地。尻が痛い。

二メートルくらいの斜面を転がって飛び出した場所は、緑の平原だった。見晴らしが良い。

それだけではない。

「アルフレイの救助隊だ！」

アルフレイ軍、災害救助隊がそこに展開されていた。

戦車が二十両。人間はその十倍以上。そこかしこに大きなテントが整然と張られている。

救助部隊の本部のようだ。

「助けてー！」

声を枯らして叫ぶものの、こちらに気づく者は一人としていない！

人の移動が激しく喧噪な状態ゆえに、声が届かないのだ。

みんな、こちらに背を向けている。仁が飛び出した場所はキャンプの裏側だった。

これでは味方が気づく前に、金獣に捕まってしまう！

とうとう金獣たちが森から飛び出す。先頭はもちろんニケ！

「最後の一発はこの時のためにある」

クレアが左手で銃を構えた。

空に向かって。

澄んだ蒼い空に轟く銃声。

アルフレイ軍の救助隊がこちらに気づいた。

クレアが叫ぶ。

「対象、スーパーS級！ 事態トリプルX！ 敵は森の中。金獣多数！」

対応は驚くべき速さで行われた。

クレアの声が終わると同時に、救助隊陣営から複数の発砲があった。

着弾地点は後ろの森。金獣たちが群がる地点。

「シ・エルファイ！　ワムカ！」

恐るべき跳躍力を見せ、森に飛び込むニケ。他の金獣たちも、晒した体を引っ込める。

金獣たちの撤退は速やか、かつ、静かであった。

もう、追っ手は来ない。

仁はその場にへたり込んだ。完全にガス欠だ。葉が燃焼させるベキエネルギーが底をついた。

いや、安堵感からか？　ミアちゃんの体温が心地よい。

重武装した兵士達が幾重にも隊列を組んで、こちらに走っている。迷彩模様の服も勇ましい。

……全員女性。なぜかミニスカート。

エンジン音が唸りを上げる。戦車までが動き出した。砲塔が回転し、森に向かって砲弾が発射された。二十台全てが連続射撃。鬼のように砲弾を叩き込む。森全体が土煙に覆われた。

この火力差、心強いのは有り難いが、ちょっと大人げないのではないだろうか？

「賭は本官の勝ちだな」

クレアさんは笑っていない。そういえばそんな賭をしたっけ。

どんどん人が仁の元に集まってくる。

集団の中でひととき目立つのが、白衣の集団。白い担架を持っている。

「医療班のお着きだ。これで本官はお役ご免。……お別れだ」
クレアが薄く笑う。

仁の周りに看護兵が取り巻いた。ナース？ 白いミニスカートと笑顔が眩しい。

みんな、額にクリスタルの飾り。流行？

「強精剤二本使用。熱がある。心身共に強衰弱。されど意志は強固」クレアの報告に頷くナース長。クレアは仁の発熱を知っていた！広げられた担架に押しつけられる仁。この状態で、一旦横になってしまえばもう最後。背筋と腹筋が終了した。動けない。

「ミアーッ！」

ナースがミアを引き離そうとしたが、仁は離さなかった。何かにするがろうとする気持ちだが、仁にとっても意外と思える力を腕に出させたのだろうか？

人が仁の周りに溢れている。クレアさんは人波に押され、遠く遠く離れていく。

彼女は自分より怪我が酷い。自分との扱いの差に憤る仁。

「クレアさんは僕より重傷なんです！ クレアさんも手当てしてください！」

仁の願いに応えてくれる者はいない。なぜか全員女の人。みんな優しい笑顔をしているが、クレアを顧みる者はいない。

救急車らしき水色の車に乗せられる。女性作業員の手がハッチにかかる。

その時、クレアさんの姿が人混みの中に見えた。

クレアも仁を見ている。二人の視線が絡まった。

クレアの周りに彼女を気にかける人はいない。周りの兵士の中に

いるからこそ気づいた。

クレアの制服がぼろぼろだったからだ。

仁の耳から喧噪が消えた。

クレアは動かないはずの右手を挙げ、敬礼した。口の端を力ずくで持ち上げ笑う。

いい女とはこの人の事か？

そして、ハッチが閉められた。

意識が薄れていく中、救急車の中を見渡すが、……ブランディ―セツトは無いようだった。

12. アルfrey・アーミー（さようなら、クレアさん）（後書き）

これにてサバイバル編終了〜！

次回（11／5）より、アルfrey・シティ編。

よろしければ、チョビつと評価ボタンを押してください♪

13. 恥ずかしながらっ！ 一人だけは助かったようですっ！

「うわばらっ！」

階段から足を踏み外してバランスを崩してしまった。
そんな夢を見て目を覚ました。

ふかふかのベッド。さらっとした接触感のタオルケット。暖かい
空気。左右に設置されたメデイカル機器類。高級感溢れるサイドテ
ーブル。

クリーム色の明るい部屋は、仁が住んでいた家の敷地より広い。

「何でここに？ ここはどこ？」

記憶の混乱。前にもあったような……。

「ミアッ！」

「ぶっ！」

仁の顔面に覆い被さるミア。お日様の匂いがする。

両手でゆっくりとミアを抱え上げると、足をバタバタさせていた。

「マー・アー」

嬉しそうなミアの顔。手を伸ばす仁。アゴの下がぽよぽよに柔ら
かい。

「あれ？」

ミアは、名札の付いた可愛い赤色の首輪をつけていた。

「金獣の幼体はジン様のお気に入りとの報告がありましたので、お
側に置いておきました」

女の人の声が降ってきた。

「気がつかれましたか？　ここはキャッスル内専属病院。ご安心を。ジン様の体に不都合はございません。まったくもって御運がよろしい」

のぞき込んだのは、笑顔の女性軍人。クレアさん！

……クレアさんじゃない。

瞳は、クレアより薄い金色。細くて長いブラウンの髪に柔らかそうな頬。年の頃は、仁より少し上のハイティーン。額には透明なクリスタル。だから流行？

……高校生くらい？

「私はライラ・リイラ。クレア大尉の所属する陸上軍の少将です」
言って小首を傾げる。長い髪がサラサラと流れる。天使も裸足で逃げるような清純派美人！

少将と言うだけあって、クレアさんの軍服とはちよつと違う。肩や胸に細かい飾り付けがついていた。

「体年齢十七歳の内年齢三十五歳。こう見えても、大尉より年上なんですよ」

にっこり笑うとても可愛い！

意思の疎通に齟齬がある……。

おや？

「……クレアさんって少尉じゃなかったっけ？」

仁は自分の記憶を疑った。

「今回の功勞により二階級特進しました。……なぜか本人は嫌がっ

ていましたけれど」

まあ、あの人は嫌がるだろうな……。

「我が陸上軍が誇る優秀な尉官がすぐ側に居合わせ、なおかつ適切な行動を取ったのが、ジン様救出作戦成功の要でした」

……なんかこう、回りくどい言い方というか、自慢臭いというか。

「あっ！」

上半身をガバッと起こす。ミアが転がる。

「そうだ、クレアさん！ クレアさんは無事ですか？ 手当してやってください！ あの人、大怪我してるんです！」

仁は、まだ混乱していたのだった。今、ようやく完全覚醒した。

ライラと名乗る少女は、仁の肩を抱き、ベッドに寝かせようとする。仁はそれに刃向かった。

「ご安心を。ジン様、救出されてからすでに二日経っております。

クレア大尉はすでに体組織修復処置を完了。軍病院に入院中。順調に回復していると報告を受けています」

それを聞いて力を抜く仁。ベッドに体を寝かせる。いそいそとミアが上に乗ってきた。

「まさか粗末な扱いを受けているって事は……」

同僚である軍の人たちに、突き飛ばされ、無視されていたクレアを思い出す。

「最優遇扱いなのでこれ以上の優遇処置は、……なんでしたらオプションをおつけしましょうか？」

「オプション？」

「アルフレイ・ランドの全ての病院内に美容形成施設が併設されて

おります。そうですね、おすすめは全身泥パックと美顔オイルマッサージですが、どういたしましょう？」

「二つとも付けてあげてください。あと、足裏マッサージも！」
これで、心おきなく寝ていられる。

仁は安心して眠りについた。

……じゃねーよ！

「琴葉ちゃんを知りませんか？ 斧田琴葉！ 僕と一緒に、こっちへ来ているはずなんです！ 僕は助けてもらったけど、琴葉ちゃんはまだ山の中にいるかも！ 大怪我してて……ああ、金獣たちに捕まって——」

「落ち着いてください！」

また起き上がった仁の肩を押さえるライラ少将。

「私の言える権限での範疇で申し上げます。コトハ様はすでに我々が別施設で……保護いたしております」

やや歯切れが悪いものの、琴葉は無事らしい。運がいいと言われた自分がこの様だ。琴葉は怪我をしているのだろう。骨折くらいしているのかもしれない。

「ジン様に、コトハ様からメッセージを預かっております」
ライラがサイドテーブルに置かれていた金属製のケースを開ける。
嚴重に封が施されている。

いくつかの鍵を開け、中から封筒をとりだした。

「どうぞ」

薄いピンク色した葉書大の封筒。

仁の左手が、それを受けとった。右手で開封口をつまむ。
急いで、それでも丁寧に開封した。

中には便箋が一枚。見覚えのある筆跡。殴り書きの縦書きだ。
『病院に来たらもう一通あるから、詳しくはそれを読んで』

「……はあ？」

誕生日プレゼントを贈るバカップルの手口ですか？　これは。

仁は、なんとなく琴葉に余裕を感じた。張り詰めていた気が一気に緩む。なんにしても無事だ。それにこの人たちは親切だ。
今度こそ安心して、ベッドに倒れ込んだ。

「ジン様は丸二日間意識をなくしておいででした。説明をいたしましょう」

ライラは、脇に控える女医に説明を促す。

背の高い女の人。白衣に黒のミニスカート。首からさげた聴診器。
赤いフレームの眼鏡に切れ長の目尻がよく似合う。

「我々のアルフレイ・ランド特有の治療法ですが、ある程度以上のダメージを負った患者は強制睡眠状態にして治療を施します。えーと、ジ、ジン様……の、お体は、全快しておられるはずです。現在、どこにも不具合はございません」

「あ、ありがとうございます」

頭を下げる仁。女医は、はにかみながら一步下がる。

こういう風習なのだろうか？

とにかく自分の体も大丈夫らしい。となると、俄然、ある疑問が吹き出してくる。

「ここはどこなんですか？　なぜ僕たちはここへ？　あなたたちは

「いったい？」

この病室には、ライラ以外に医療スタッフが数名、詰めていた。
全員女性。

ミア以外、みんな額にクリスタル。だから流行？

ライラは、手を振って彼女らに退室を促した。

この広い病室に、二人きり……グルーミングしているミアを含め、三人きりになったことを確認してから、ライラが口を開いた。

「私が答えられるのは、ここがアルfrey・ランドであると言う事柄だけ。その他につきましては、私に話す権限がございません」
がっかりした内容。……また権限か。

ライラは、そんな仁の心を見透かしたように話を繋ぐ。

「セントラルには、全てを話す権限を持つ者。調整者が（コントローラー）おります」

ライラはにつこりと笑った。クレアと言ってることは同じだが、笑顔は違う。

……言うなれば営業スマイルだった。

「それに、各種手続きが必要ですからね。ジン様のご都合に合わせて参りましょう。いつがよろしいですか？」

「今すぐに！」

意識して元気に答えた。一刻も早く琴葉の事、アルfrey・ランドの事を聞き出したい。体調不良を理由に、調整者なる人物に会えるチャンスを先のばしされたくないからだった。

13. 恥ずかしながらっ！ 一人だけは助かったようですっ！ (後書き)

いよいよアルfrey・シテイ編始まり。

いっぱいいっぱいお姉さんがでてきます。

よろしければポチッと評価ボタンを押してください。

まもなく作者の感謝が付いてきます！

14. キャツスル

クローゼットから出された学生服は、クリーニング済みだった。逃避行中に作ったかぎ裂きまで綺麗に修理されている。

ズボンをはいて……ポケットに携帯が入っていた。

取り出して見つめて——もう一度、ポケットへ大事に収め、病室の外へ出た。

仁が入院していた病院施設は、アルフレイ・ランドの首都中央に位置する、巨大な建築物の中にあった。

これまた仁の家のリビングより広いエレベーターで降り、五階ぶち抜き吹き抜けの巨大エントランスを抜け、旅客機が横付けできる、一枚ガラス張りの広大な車寄せに出てきた。

ナース、ウエイトレス、ポーター、作業員、事務員風、軍人、エトセトラ……。この建造物で働いてる全員ではないだろうかという人数が、そこで頭を下げていた。

みんな額にクリスタルの女の子だったが。……ミアが意図的にかい態度をしていたが。

——アルフレイ・ランドにおいて、軍将校とは格別な地位に立つのであろうか？

実はアルフレイ・ランドとは軍事独裁国家で、ライラ少将は、その独裁者の子供だったりして。そんなもって、この国では、独裁者が調整者と呼ばれているのだろう。

仁の防衛本能が働いた。ライラさんに対して、エッチな妄想をしてはいけない！

ライラの後ろに続いて、腰を低くして外へ出る仁。

空が青い。天井付きの車寄せから外へ出たことになる。

くるりと振り返るライラ。仁の後ろを指さす。

「目的地は、今出たビルの隣です」

つられて振り返る仁。

二つ並んだ高層建築。ツインタワーとはいえない。デザインが正反対だった。

「今出てきたのが、右の塔。セントラルのキャッスルと呼ばれる建物」

ピンク色とか、薄ベージュ色とか、なんとなく劣情をかき立てる色合いの力学的高層建築物が天に向かってそそり立っている。

でも、キャッスルってお城じゃないの？　今まで独裁者の実家で寝ていた？

「そして左側の塔がこれからご案内申し上げますセントラルのコントロールセンター」

イタリアンレッドを基調とした、これまた官公庁にあるまじき配色のビル。キャッスルよりは丸っこいデザインで、やや背も低い。独裁者が辣腕を振るう国会みたいなものか？

「あの中で調整者がお待ちしております」

左というと……おお、懐かしい。

「お茶碗を持つ方ですね？」

「お茶碗？」

ライラが訝しげに仁を見た。

「こちらですが……」

もどかしかったのか、左手を挙げ、その手で左の塔を指さす。

あれ？ 通じないの？ ライラ少将、ナイフとフォーク派？

「現在ジン様は陸上軍の保護下に置かれております。わが陸上軍の大尉が保護いたしましたので、便宜上、引き続き陸上軍が保護に努めることになりました。その事を事前に申し上げておきます」

なんとなく……なんとなく、こう……きな臭いにおいがそこはか
となく……。

仁は試してみることにした。

「海で溺れていれば海上軍の保護下に置かれていたのでしょうか？」

ライラは、声を殺して笑った。

「海上軍にそんな力があれば、ですね。海に落ちていれば、ジン様のお命は無かったと思います」

こ、これは――。陸上軍バーサス海上軍の図式ってヤツですか？

「なるほど」

自分にどんな利用法があるのかわからないが、なんだかとっても
面倒くさい事象に巻き込まれる予感。

「ところでジン様」

態度を改めるライラ少将。なんだか、足をもじもじさせている。

「私、綺麗？」

上目遣いの流し目。とっさのことでどう反応して良いのかわから
ない。

「綺麗な、お姉さんは好き？」

これはあれ？ やっぱ、僕が気に入ったの？ 調整者なる独裁者をお父様と呼ばなきゃいけないの？ 琴葉ちゃんの手前、それはちよつとまずい。

……いや、いやいや、琴葉ちゃんの立場が危なくなる。

「えー、あー、し、少将はお綺麗ですよ」
無難に答える仁。

ライラが太陽のような笑顔になった。営業スマイルではない。

「では、まいりましょうか」

両手の指をちゃんと合わせ、先に歩き出す。……なんか今の可愛かったぞ！

仁は、不明瞭な期待に胸を躍らせつつ、左の塔、コントロールセンターへ入っていったのだった。

14. キャッスル（後書き）

えーっと……。

酔った勢いで投稿……っと！

……。

次回は明日（11／6）お昼の予定。

よろしければポチッと評価ボタンを押してください。
もれなく作者の愛が付いてきます。

15. ハーレム・ハーレム!

「えーと、つまり、こういう事ですね……」

先ほどの過度な期待と緊張とは裏腹に、ダウンナーな仁がいた。一通り説明を受けた仁。体全体が沈み込むようなソファーに、小さくなって座っている。

「まず、あなた……えーと……」

「調整者のコトシロです」

「そう、コトシロさん。あなたはアル弗雷イ・ランドのコンピューターに繋がったサイボーグであると……」

オレンジ系のルージュを引いた唇に、柔らかい笑みを乗せるコトシロ。どこかで聞いたような名前。……天津神と戦った国津神のヤエコトシロヌシ。……は、関係ないか。

年齢は不詳だが、総合的に見て、二十代半ばの女性である。スタイルも悪くない。涼しげな声。口元に浮かぶ微笑みも、柔らかくて好ましかった。

どう見ても独裁者には見えない。ましてや、ライラさんのお父さんにも見えない。

「正確には、アル弗雷イ・ランドのスーパークラウドコンピュータの統括権を持ったコントローラーです」
右手を開くコトシロ。

その手は、人の手ではない。メタリックに冷たく輝く人工の物。

剥き出しの指関節。マニピュレーターと呼ぶ方が実感が湧く。

樹脂製とも金属製ともとれるヘッドセット。下から伸びる黒髪は本物……本物っぽい。コトシロさんの方が長いけど、琴葉ちゃんによく似た髪質だ。

黒いバイザーが両目を覆っていて、目の表情が読めない。……目はあるのだろうか？ 目のあるべき位置からコードが出てたら嫌だな。

そして鼻から下、細く尖った顎まで生身。首は樹脂製のハイネツクで覆われている。

胴体は人の物だ。あの肌は、人工の物ではない。そんな肌をハイレグの薄い衣で隠している。

で、問題は両腕と両足。完全に機械。

肩間接なんかは剥き出し。あと、後頭部から二本伸びたオレンジ色のチューブが気になるところか……。ドレッドヘアではなさそうだ。

そんな半メカの人物が仁の前、小さなコンソールの脇に立ってる。本物だとしたら、仁のメカフェチが目覚めようと、……もとい。それこそアルフレイ・ランドという国はいいたい？

「じゃ、ライラさんは、独裁者のお子様ではないということに？」

「お言葉の理解に苦しみますが、ライラは実力で今の地位に就いた将校です」

「そうでしょう、そうでしょうとも！」

仁は話を誤魔化した。顔が赤くなっているのを静めるため、ジュースに手を伸ばした。

ミアの分も出ていたが、早々に飲み干し、今は仁の膝で眠りこけている。仁が喋るたび、ミアの尖った耳がヒクヒク動いている。眠りが浅いのだろう。

「で、琴葉を保護している？」

さらに勘違いを亡き者とするため、話を無理に戻した。

「今はだめですが、条件がそろえば接見室に入ることができます」
そのあたりはライラに聞いた。ここの病院はエステ機能付きだ。
琴葉は、ずいぶん余裕をぶっこいてくれている。

居眠りから目を覚ましたのか、膝の上でミアが大きな欠伸をした。
コトシロが細かく動かす指を目で追うミア。たぶん、コトシロもミアを気にしているのだろう。

「ミアちゃんというその幼体。良い名前をおつけになりましたね。
金獣の言葉で『小さな女の子』という意味なのですよ。性的な意味
で」

「だめじゃん、それ！」

あれ？ ということは……。

「コトシロさん金獣の言葉を話せるんですか？」

「当然。わたくしはアルフレイ・ランドのコントローラーです。言
って聞くような存在ではありませんが、金獣もわたくしの支配下……
に形式上あるのですけれども、困ったものです」

顎に人差し指を当て、小首を傾げるコトシロ。

そりゃ確かに困るでしょう。

「ミアちゃんの首輪に付いている飾りですが……」

言葉を句切ったコトシロさんが、含み笑いをする。

「私ミアちゃん、よろしくね」

ミアが喋った。

いやいやいや、ミアの喉元、首輪から声が聞こえた。

当のミアが一番びっくりしている。二本足立になって目を丸くしている。

「名目上は金獣の幼体の監視なのですが、首輪には、簡単な位置発信器とスピーカーを仕込んでいます。これで迷子になっても位置が特定できます。ミアちゃん、迷子になったら困るもんねー」

それは便利だが、コトシロさん、意外とファンキー。子供が好きなんだなー。

仁の顔が少しにやける。

——いかんいかん、話がそれた。ライラさんが変な顔をして、こっちを見てる。

仁は、咳払いを一つして話を元に戻した。

「で、次にこの国というか、地域なんですが、……アルフレイ・ランドは、コトシロさん達がチキュウと呼ぶ惑星最大の大陸なんですよね？」

アルフレイ・ランド。アルフレイ国という意味だろうが、……仁の記憶に、アルフレイなんて国も大陸もない。

「そうそう、百聞は一見にしかず。地図をご覧ください」

コトシロが壁に顔を向ける。埋め込まれた横長のディスプレイが輝きだす。浮き上がってきた画像はアルフレイを中心としたモルワイデ図法。衛星写真が元になってる。

デフォルメされたタツノオトシゴというか、腰をひねったカブトムシのメスというか……。

それがアルフレイ大陸。

大陸というより、大きい島と言った方が良いかもしれない。

陸において面積が広いグループを大陸と定義するならば、アルフレイ・ランドは大陸だ。

そんな図形が南半球に一つ。

で、その自称大陸以外は全て青色。つまり海。両極も青。白いのが無い。

ちよこつと離れた西の方に、子供が書いたびっくりマークのような陸がある。その向こうは芥子粒のような点々がまばらにあるのみ。

「なるほど」

頷く仁。――あの超常現象が原因だ。ここは地球じゃない。いわゆるパラレルワールド。水の量がハンパねえ。

そして次が、ある意味一番肝心な話。パラレルワールド説を冷静に聞けた理由なのであった。

15. ハーレム・ハーレム！（後書き）

いよいよ、アル弗雷ランドの謎が明かされる！
クレアさんやライラさんの謎が明らかに！（煽っているつもり）

よろしければポチッと評価ボタンを押してください。
まもなく作者の真心が付いてきます！

16. アルフレイ人の秘密。

「えーと、それからクレア……大尉や、ライラ少将たち、アルフレイの人たちは、エルフイって種族で、人間じゃない、と？」
そこがいまいち信じにくいところ。

「ええ、種族どころか生物ですらありません。エルフイの初期開発名称が、ロボ・ワイフだったそうです」

「ほほう！」

仁は、眉につばを付けてから話を続けた。

「えーと、人の手によって作られた疑似生命体で、……原始分子から始まって、体を構成するタンパク質まで、全て無から人の手によって作られたと……」

「その通りです」

ライラが胸を張る。

「エルフイは工場生まれ（ロールウト）、一括して教育されます。見かけはヒトと大差ありませんが、ヒトではありません。生物でもありません。疑似微生物や疑似昆虫を初め、食料となる動植物まで全て、我らが敬愛する、創造主^{マスター}ヒトの生み出した物。我らエルフイにとって、創造主であるヒトは、神に相当するのです」

その点にだけは！ とばかりに合いの手を入れるライラ少将。マスターの発音あたりで顔が輝く。

人間を作ったのが神であるなら、彼女らにとって、エルフイを作った人間が神の地位に立つというわけなのか？

でも、神扱いの割に軽い。それは宗教観が無い証。ここは神様のいない世界。——と、これは仁の推測。

クレアさんが母と呼ぶ人は育ての親か……。父親が存在しないと言っていたのは、本当に存在しないという意味だったのだ。

「で、もともとチキユウに住んでいた人間達は、何らかの理由で、ある時を境に、地球上から姿を消した、と？」

コトシロがゆっくりと頷いた。

「約千年前のお話です。場所は知らされておりません。おそらく衛星軌道より上の、どこかに、新しい居住区を作り、移り住んだものと思われます」

上を見上げる仁。スペースコロニーか、他の惑星へ移住したのだろうか？

移住した理由はなんだろう？ 戦争か、昨今流行の環境破壊か。陸地がアルフレイだけになったのも、なんか理由になってるのだろうか？

「そして、そのどこからか、人間達が『ビフレストの橋』という転送技術を使って、地上へやってくる、と？」

ゆっくりと頷くコトシロ。

「マスター達は、ビフレスト・ポートと呼ばれる施設内に降りてくる、ビフレスト・ポットで行き来していました。最繁期は六百四十機あったビフレスト・ポットでしたが、故障や劣化が進み、現在はたった一機。それも故障するのは時間の問題」

コトシロの目がこちらからは見えないので、何を思っているのか、いまいちわからない。

「なぜか人間、……もとい、マスター達が来なくなって二百年が過ぎた？」

何かが起こったな！

「正確には三百年で一人だけ。とても悲しい瞳をしたマスターであったと伝承にあります」

コトシロが、バイザーの内側に写っているであろう情報を読み取っていた。

「本物の『ビフレストの橋』はエレベーターサイズ。ペンテコステ御降臨される場所も決まっております。山一つが破碎されるような危険なシステムではありません。ジン様が巻き込まれたという超常現象が引き金となって、いわば『亜ビフレストの橋現象』が起こったものと推測されます」

ま、そのあたりは納得できる。つか、体感したし、死にそうになったし。

「で、もう一度超常現象が起こる可能性が高いから、その時は元の世界へ帰れる、と？」

そこが一番大事。大事だからもう一度言う。

そこが一番大事！

この話をさっき聞いたから、ここまで冷静でいられたのだ。

素の表情で——目はバイザーで見えないが——頷くコトシロ。下の表情は、おそらく柔和なものはず。

「我々はジン様の世界まで、ピンポイントでビフレストの橋をかける手段を持ち合わせておりません。しかし——」

細い顎を引き、口元を引き締めるコトシロ。

「エネルギーバランスを戻すため、同じ現象が必ず起こると断言できます。たとえるなら……そうそう、柱時計の振り子が戻ってくる様な。揺れ戻しですね。その時が唯一無二のチャンス」

喜色を顔に浮かべる仁。

「ああ、今よい知らせが入ってきました。中央電算部からの報告です」

バイザー越しに遠くを見るようなコトシロ。

「二回の事象で、亜ビフレストの橋現象発生時のエネルギースペクトルパターンを採取・分析できました。充分観測が可能です。そして我がアルフレイの全観測システムは、総動員体勢に入っております」

——光が見えた。

16. アル弗雷イ人の秘密。(後書き)

やればできるじゃないか！ 2回更新／日
初期のナニではダツチ……ゲフンゲフン！

次回更新は11／7お昼の予定。

よろしければポチッと評価ボタンを押してください。
まもなく作者の投げキッスが付いてきます！

19. おでん。だがハーレム！

「いやー、びっくりした。まさか、あんなスタイルのクレアさんと再会するとは！」

「いやかましいわー！」
手にしたスリッパを床にたたきつけるクレア。

今は白い軍服のクレア。ただ、ちょっと胸元にくりがある。そこからマシユマロのように柔らかそうな谷間が覗いている。それが陸上軍服飾部が、クレアとせめぎ合った末の、精一杯の抵抗であった。

「マスターを喜ばせようって気持ちは嬉しいけど、全力で方向を間違って、いえ、何でもないです！ すんませんでしたーっ！」

大型の拳銃を一挙動で抜き放ち、第一弾を装填し終えたクレア少佐。顔が真っ赤だ。

「これは対金獣用の大型銃だ。アレについてこれ以上何も言うな。全て忘れろ、いいな？」

アレは、忘れろと言われて忘れられるような、柔なインパクトではない。それでなくとも仁は十四歳。向こう半年、あの記憶だけで生きていけます的生動画であった。

「はい、忘れました、少佐殿！ そうそう、ご昇級おめでとうございます！」

そう。彼女は仁お側付きという地位を得て、一階級上がったのだ。アルフレイ陸上軍マスター・ジン付き少佐というのが、今の彼女の地位。

「ヒト一人助けただけで、昇級されてしまって！ 貴様……じゃな

くてマスター！ 少佐という立場を知っておるか？ 管理職だぞ！
前線に出られないのだぞ！ 新兵をネチる……もとい、教育する
立場で無くなったのだぞ！ 本官以外に厳しく新兵をネチる……も
とい、鍛えられる人材が、このアルフレイのどこにいますのか
！」

サバイバルの時より一回り大型になった拳銃を本棚に向かって三
連射。

ハードカバー写真集を含む、貴重な資料が粉々になって吹き飛ん
だ。

「どうなさいました！」

ドアが開き、少女兵が二人なだれ込んできた。手には短機関銃。
ドア外で待機するマスター専用衛兵の女の子だ。

とうぜん、ミニスカート。しゃがんで構えている子など、ふっく
らとしたシマシマの逆三角が丸見えで、目のやり場に困る。

「僕がちょっと、アレしてコレしてナニしただけです！ 何でもあ
りません！」

渋々というか、仁に流し目というか、「わたしも是非お側付きに
！」と訴えてるようなサインを送りながら、部屋を出て行く衛兵。

「ご迷惑おかけしました！ ごめんなさい、ごめんなさい！」
謝りまくる仁。

あれ？ ちょっとまでよ、なんで僕が腰を低くしなければならな
い？

「クレアさんは、エルフィなんですよね？」

「何を今さら」

「エルフィはマスターである人間の前に出ると、その人を愛そうと

する習性がある」

「その通りだが、なにか？」

「じゃ、なんで僕を前にして何ともないんですか？」

「精神力」

会話が途切れた。

「えーと……」

「本官の気質は、より軍人としての運用に重きを置かれて設定されている。エルフィ全員がマスターに恋狂いしてはシステムが成り行かんでな。説明があつたはずだ。我らエルフィは人造疑似生命体であると。疑似生命活動を開始する前に性格を設定できるので」

つまり、本官が一番キャッキャウフフしにくい人格であると、こう申しているわけだ。

がっくり膝をつく仁。

……他に、お尻の軽い、可愛い子がいっぱいいたというのに。ドアの外にも二人……。

「マー・カー」

二歳児のミアに、優しく頭をなでてもらっている。それが悲しい。それが惨め。

中学二年男子として、最悪の人選をしたのかもしれない。

「ま、選んでくれて有り難いと思っている。エルフィとして生まれたからには、マスターに愛されてナンボの人生だからな。人生五十年。エルフィの一生は夢幻の（ゆめまぼろし）ように短く儚い」
どこかで聞いたようなフレーズ。

「寿命短いんですか？ エルフィの皆さん」

仁の問いに、まずいこと聞かれたとばかり舌打ちをするクレア。額のクリスタルを指でトントンし、仕方ないとばかりに口を開いた。「きっかり五十年だ。多少人格が変わっていいのなら、意識を新しい体に移すこともできる。過去、マスターがお気に入りの方をそうやって延命させたことがあるという」

いや、ほんとロボットだ。パソコンの寿命が来たら新しいパソコンへファイルを引っ越しさせるような感覚だろうか？

クレアさんが悪戯っぽく笑う。

「なかには大枚払って、性転換目的でエルフィになるマスターもいた、という話もある。どうだ？ 貴様……もとい、マスターも、一つ経験を積んでみるか？」

プルプルと激しく首を振る仁。

「だろうな」

S的愉悦感をひとしきり顔に浮かべるクレア。でも綺麗。額のクリスタルが……あれ？

「クレアさん、額のアクセサリ、ピンク色してましたっけ？」

指さす仁。ダイヤモンドのように無色透明だったクリスタルっぽいジュエリーが、綺麗なピンク色に染まっていた。

「あ、これか？ これは気分的なモノだ。気にするな」

トントンとクリスタルを指で叩いたクレアさん。いそいそと黒檀のディスクから椅子を引っ張り出し、綺麗な足を組んで座ろうとする。

組み終わる直前がチャンス！ 姿勢を低くする仁。いや、ちょっ

と速すぎ！

何も見えなかった……。

もともとタイトミニだったスカートがさらに短くなっていて、とても目の保養に……もとい、目の毒だ。

極薄のノーパソを立ち上げ、何やら入力しだした。

「それは？」

「仕事だ。毎日、その日一日の報告書を提出しなければならぬのでな！」

仁は、窓から外を見る。抜けるような青空が広がっていた。

続いて、金銀で装飾された豪華で巨大な鳩時計を見上げる。正午には数十分を残した時間だ。

「まだ一日終わってませんが……」

「朝から一回。……朝の方が調子良いというマスターがいると聞くしな。就寝は二十一時と。こんなもんでいいだろう。いいな、口裏を合わせるのだぞ！」

口裏をあわせるのも何も、ぜんぜんいい目見てないし、見られないし！

「僕マスターだよ！ 知ってる？ マ・ス・タ・ア！ エルフィの皆さんにとって絶対者マスター。神！ 勝手にスケジュール決めないでくれる？ パンツ何色だよ！」

怒りのあまり、クレアに指を突きつけ声を荒げる仁。

「知ってるよマスター！ 薄ピンクだよマスター！ だから何だマスター！」

立ち上がるとクレアの方が背が高い。軽く額を小突かれた。

「貴様……もとい、マスターは『恋人』という玩具が欲しいだけだろう？　恋という経験をしたいただけだろう？　コトハとかいう女の事をどう思っているのだ？　私の、いや本官の前でコトハを好きと言ったのはなんだったんだ？　真剣にヒトを好きになった事があるのか？　恋をしたいだけ。つまり恋に恋しているだけではないのか？」

一気にたたみかけるクレア。彼女の言葉という切っ先はレイピアより鋭く、十四歳の心を切り刻んでいく。

「ごめんなさい、ごめんなさい。もう虐めないでください！」
謝ってしまう仁。耳を押さえ、小さくなって震えている。

クレアは眉をゆるめ、ため息を一つついた。

「わかれば良い。あまり気にするな。気を抜くと好きになってしま
うから、自分を奮い立たせているだけだ」
うって変わって優しい声。

「え？　耳ふさいでたんで聞き取れませんでした。最後の方なん
と？」

「何でもない！　気にするな！」
また怒り出すクレア。

「そうそう、お昼時だな。昼食をとるとしよう。その後、町の案内
をしてやろう」

話さがらりと変わった。

ディスクの受話器を取り、なにやら命令している。頬がちよっぴ
り上気しているクレアであった。

「貴様……もとい、マスターの好物であろう？」

……お昼はおでんだった。確かにその通りだが……。

話通り、練り物の多い具材であった。

香辛料をよくきかせたブイヤベース仕立てだった。おでんであったおでんでない。

それは何かと尋ねたら。煮て異なる料理。うまいこと言えた。

仁は、フォークに刺さったパイプ状の練り物を眺めていた。

テーブルの下、ミアが幸せそうな顔をしてスクリュー状のカマボコにかじりついていた。

クレアさんは、ナイフとフォークを使って黙々と食べている。

「食べんのか？」

「いえ、いただきます」

ナイフで一口サイズに切り取り、口へ運ぶ。情緒もへったくれもない。

美味しい、でもおでんの味じゃない。もちろん関東煮の味でもない。

「ところでクレアさん、いつになったら琴葉ちゃんに面会できるんですか？」

きょとんとした顔を上げるクレア。

「会いたいのなら、申請書、出しておこうか？」

申請しなければ許可も下りない。官僚的なアルフレイ・ランドのシステムであった。

19. おでん。だがハーレム！（後書き）

辛子をたっぷり付けたおでん。おいしいですね！

次回、11／8お昼更新予定！

よろしければポチッと評価ボタンを押してください。
まもなく作者のアレが付いてきます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0068y/>

僕の彼女は百四十万人

2011年11月7日13時03分発行